

# 無学祖元の伝記史料

——無象静照撰『仏光禪師行状』の訓註——

佐藤秀孝

## 凡例

- 一、本史料は南宋末元初に日本に渡来して鎌倉山之内の瑞鹿山円覚興聖禪寺の開山として活躍した臨済宗破庵派（仏光派祖）の無学祖元（子元、仏光禪師、仏光円満常照国師、一二二六—一二八六）に関する伝記史料の訳註である。
- 一、本史料の翻刻に当たつて底本としたのは、『仏光円満常照国師語録』（以下、単に『仏光国師語録』と略称）の巻末に所収される臨済宗松源派（法海派祖）の無象静照（法海禪師、一二三四—一三〇六）が祖元の示寂してまもない頃に撰したと見られる「仏光禪師行状」である。
- 一、異本として石川県金沢市の天徳院所蔵『禪林諸祖伝』七に所収される静照撰「仏光禪師行状」の内容を対校しておきたい。ただし、禪林諸祖伝本との対校については、正字と別体・異体など旧字体の間での厳密な相違までは、煩瑣にわたるため指摘しないものとする。
- 一、無学祖元に関しては、ほかにも参考となる伝記史料が数種伝えられているため、記事内容を比較検討することが可能であるが、ここではきわめて煩瑣にわたるため、他の伝記史料の当該箇所各記述を併せて列記することは控えておきたい。
- 一、訓読文では原則として常用漢字に改め、送り仮名も歴史仮名使いではなく、現今の仮名表記に統一しておきたい。
- 一、本史料の書き下しに関しては、江戸刊本の享保二年（一七二六）刊行『仏光円満国師語録』（駒澤大学図書館所蔵）の返り点やルビを参考にする。
- 一、あくまで本史料を読解することを目的としていることから、他の諸史料との比較検討を通じた無学祖元伝の総合的な考証は煩瑣にわたるため、別の機会に譲るものとする。

〔伝記史料の表題〕  
 佛光禪師行状。

仏光禪師の行状。

仏光禪師行状：臨濟宗破庵派(仏光派祖)の無学祖元(子元、仏光禪師、  
 仏光円満常照国師、一二二六―一二八六)の伝記史料の一つ。臨濟  
 宗松源派(法海派祖)の無象静照(法海禪師、一二三四―一三〇六)  
 が無学祖元の示寂した直後に日本で撰述した最も古い祖元に関する  
 伝記史料である。静照が本史料を撰じた具体的な年月日は明記され  
 ていないが、もともと祖元の門人慧曇らが記した行実として、およ  
 しくは「無学和尚行実」といった表題の伝記史料が先に存し、これ  
 に静照が自らの目当たりにした内容や伝え聞いた記事を加味してか  
 なり早い時期に撰述したものであると推測される。静照撰「仏光  
 禪師行状」は、祖元が日本に渡来して以降、とりわけ示寂の前後に  
 至る記載にきわめて臨場感に満ちた表現が見られ、祖元の示寂に立  
 ち会った静照ならではの筆致といえよう。ほかに祖元に関する基本  
 的な伝記史料としては、元代の中国で著されたものに大慧派の用潜  
 覚明が状した「無学禪師行状」と、松源派の靈石如芝(仏鑑禪師、  
 一二四六―?)が状した「無学禪師行状」と、文人官僚の掲俟斯(字  
 は曼碩、諡は文安、一二七四―一三四四)が撰じた「仏光禪師塔銘」

が存している。また日本で著されたものとしても鎌倉後期の静照撰  
 の伝記史料のほかに、祖元の俗系で元国から日本に渡来した曹洞宗  
 宏智派の東陵永瑛(妙応光国慧海慈濟禪師、一二八五―一三六五)  
 が南北朝中期に撰じた「大日本国山城州万年山真如禪寺開山仏光無  
 学禪師正脈塔院碑銘」が存している。これら数種の伝記史料はいず  
 れも『仏光国師語録』巻九「円覚開山仏光円満常照国師拾遺襍録」  
 の末尾(大正藏八〇・二三八a)―二四三aと日仏全四八・一五九a)―  
 一六三a)に一括して収められている。別に聖一派の虎関師鍊(海  
 藏和尚、本覚国師、二七八―一三四六)が鎌倉末期に編集した『元  
 亨釈書』巻八の「釈祖元(宋国祖元)」の章も、かなり詳しい伝記を  
 伝えている。一方、重要なのは同じく『仏光国師語録』巻九「円覚  
 開山仏光円満常照国師拾遺襍録」に守塔比丘光一が編した祖元の「告  
 香普説」が収められていることであろう。この「告香普説」は祖元  
 自身が往年の辨道修行の過程を顧みるかたちで門下に語った内容と  
 なっており、かなり主観的な内容ではあるが、修行遍歴が祖元本人  
 のことばで語られている点で第一等の史料といえよう。

〔郷里・俗姓と出生の因縁〕

師諱祖元。字子元、號無學也。生於大宋寶慶丙戌年也。世家慶元府鄞之翔鳳里東湖、姓許氏。父伯濟、高曾皆衣冠。母陳氏、初夢一僧抱一嬰兒授、了乃孕。及坐蓐、母以累重欲不育。其午夜、忽見一白衣女人登牀、乃曰、此佳男子不可弃。叮嚀者甚切、左右亦聞之。未幾而誕、白光照室、莫不驚訝。

慶曆 氏一子 了子 孕一朶 牀一床 誕 誕語

師、諱は祖元。字は子元、無學と号するなり。大宋の寶慶丙戌の年に生まる。世に慶元府鄞の翔鳳里東湖に家す。姓は許氏。父は伯濟。高曾は皆な衣冠たり。母の陳氏、初め一僧の一りの嬰兒を抱きて授くるを夢み、了に乃ち孕む。坐蓐に及んで、母、累重を以て育てざらんと欲す。其の午夜、忽ち一りの白衣の女人が牀に登るを見るに、乃ち曰く、「此の佳男子、弃つ可からず」と。叮嚀なること甚だ切にして、左右も亦た之れを聞く。未だ幾ならずして誕まるるに、白光は室を照らし、驚訝せざる莫し。

諱は祖元：諱とは法諱のことで、僧侶の実名をいう。この人の僧名は

祖元であり、後に示すごとく杭州淨慈寺の北磻居簡のもとで祝髮得度

した際に受業師の居簡から命名されたものであろう。

字は子元：字が子元とされるが、あるいは祖元の出家以前の幼名であつ

た可能性も存する。

無學：祖元の道号。無學とは「すべてを学び尽くしてさらに学ぶものがない」の意。阿羅漢果を無學位・無學果という。当時、南宋禅林では「趙州無字」の公案が盛んに参究され、本師となつた無準師範や『無門関』の無門慧開など「無」の字を道号に用いる禅僧がかなり存する。

大宋：大宋国。ここではとくに杭州（浙江省）臨安府に国都（行在所）

を置いた南宋（一二七—一二七九）の時代を指す。

寶慶丙戌の年：南宋の理宗（名は趙昀、初名は貴誠、一二〇五—

一二六四、在位は一二四—一二六四）の寶慶二年（日本の嘉祿二年、

一二二六）に当たる。この年には日本僧の道元（仏法房、一一〇〇

—一二五三）が同じ明州鄞県東六〇里の天童山景德禅寺に在つて曹

洞宗真歇派の長翁如淨（淨長、一一六二—一二二七）に参学している。

慶元府鄞：慶元府は南宋代における明州（浙江省）の呼称。後世の寧波府、現在の浙江省寧波市（寧波地区）に当たる。鄞は明州府城を取り囲む鄞県の地。現在の寧波市の鄞県地区に当たる。祖元が生まれた南宋代には、明州慶元府は鄞県・奉化県・定海県・慈溪県・象山県・昌国県の六県に分けられている。

翔鳳里：明州鄞県東南四〇里に存する翔鳳郷の地のこと。『延祐四明志』卷八「郷都」の「鄞県」に「翔鳳郷在鄞県東南四十里、旧有里一滄門・村一隱学、今管郷都五」とある。

東湖：明州鄞県東南に存する東銭湖のこと。寧波市の市街地から東南一五キロに当たる。東西六・五キロ、南北八・五キロ、周囲四五キロで、浙江省最大の淡水湖。七二の溪流が注ぎ込み、七つの堰があつて水門を開閉し、鄞県・定海県の水田を灌漑し、周囲の郷村に多大な利益を齎したことから、万金湖とも称されている。『宝慶四明志』卷二「鄞県志」の「山水」に「東銭湖、県東三十五里、一名「万金湖」とある。南宋中期の宰相であつた史浩(字は直翁、号は鄞峰真隱、一一〇六一―一九四)は東銭湖のほとり月波山下に慈悲普濟教寺(月波寺)を創建して水陸会を行ない、南宋末期に天台宗の志盤はこの寺で『水陸勝会修齋儀軌』六巻を著している。史浩の子である宰相の史彌遠(字は同叔、魯公、一一六四―一二三三)も東銭湖のほとり下水畝の地に大慈山教忠報国禪寺(大慈寺)を創建し、大慧派の笑翁妙堪(一一七七一―二四八)を開山としている。

姓は許氏：祖元の生家である許氏は明州鄞県の名族の一つであつたらしい。曹洞宗宏智派の東陵永瑛(妙応光国慧海慈濟禪師、一二八五―一三六五)が撰した「大日本国山城州万年山真如禪寺開山仏光無学禪師正脈塔院碑銘」によれば、鄞県には方・許・畢・繆という四姓の大族があり、郡内で難があつた際にはこの四姓の名家がこれに対応したとされる。

父は伯濟：祖元の父親は許伯濟(？―一二三八)とされる。ただし、伯濟というのが諱すなわち実名であつたのか、字または号の類いであつたのかは明確でない。

高曾：高祖と曾祖。高祖は祖父の祖父、曾祖は祖父の父すなわち曾祖父のこと。世代でいうと高祖・曾祖・祖父・父・本人となる。

衣冠：衣服と冠。正しい装束。衣冠を付ける身分の者。官吏・官僚・役人のこと。転じて尊い家柄や貴人を意味する。

母の陳氏：母の俗姓は陳氏とされるのみで、実名などについては定かでない。ただ、母の陳氏は祖元の五〇歳近くまで健在であつたことが本伝記史料などによつて判明する。

嬰兒：嬰子とも。赤ん坊。みどり子。乳飲み子。生まれたばかりの小児。胸に抱きかかえられる年頃の幼子。

坐蓐：坐褥とも。婦人が出産に臨むこと。産褥につくこと。産褥は産褥とも、婦人が出産のとき寝る寝床。別に仏家で用いる大きな座布団も坐褥という。

累重：身の煩いとなるもの。足手まといになるもの。邪魔なもの。また子どもの多いことをいう。

午夜：夜の十二時。夜半・半夜。真夜中。昼の十二時の午の転用。

白衣の女人：白い着物の女性。僧侶が法衣として黒衣を着るのに対し、俗人は白衣と称される。ただし、ここにいる白衣の女人とは白衣観音のことを指しているとも解される。

佳男子：立派な男の子。品行の佳いすぐれた男の子。

叮嚀…懇ろに頼む意。物事に念を入れること。丁寧と同じ。  
左右…左右の人。側の人。ここでは母以外の家族の人々のことを指そう。

白光…白光。清らかな明るい光。仏光などをいう。  
驚訝…驚き怪しむこと。ビックリして不思議に思うこと。訝ること。

### 〔幼少時の逸話と仏縁〕

迨乎試周之日、於儒釋文籍百玩之中、師惟咲取釋書而已。及六七歲、就家塾讀書、疑問應對、穎出童輩。少成之性、沈重木訥、容貌英異、威像奇傑。雖姉姓親、而不喜見。凡羶血不食、或見屠宰毛羽、痛如切己、素蘊利生愛物之慈矣。年十二、偶隨父兄遊山寺、見僧吟竹影掃階塵不動、月穿潭底水無痕。師默契于懷、已無在俗之意。

於—家人羅 中—物于前 惟—皆不視於儒釋文籍百玩中師唯 及—乃 疑問應對—審思疑問洒掃應對 童—童稚 威像奇傑—威奇  
姉姓親—姉妹婢妾姓親 見—見飲啜見 血—血者

試周ししゅうの日に迨およんで、儒釈にゅうしやくの文籍ぶんしやくと百玩ひやくがんの中に於おいて、師し、惟ただだ咲わいて釈書しやくしよを取るのみ。六七歳かちやくに及およんで、家塾かじやくに就かいて書しよを読よむに、疑問いもん應對いどう、童輩どうはいに穎えい出す。少成せうじやうの性せい、沈重しんじゆう木訥ぼくたくにして、容貌ようぼうは英異えいぎに、威像ゐざうは奇傑きけつたり。姉せ姓親せいしんと雖いも、而しかも見みることを喜よろこばず。凡せんじつそ羶血じやんけつは食たせず、或あるいは屠宰とさ毛羽もううを見ては、痛いたきこと己おのれを切きるが如ごとく、利生りじやう愛物あいぶつの慈じみを素蘊そうんす。年十二ねんじふににして、偶たまたま父兄ふけいに隨したがいて山寺さんじに遊あそぶに、僧そうが「竹影ちくえい、階かゐを掃はいて塵ちりは動うかず、月つきは潭底たんていを穿たちて水みづに痕あと無なし」と吟うたずるを見る。師し、懷こころに默契ごうぎし、己おのれに俗よこに在あるの意い無なし。

試周の日：試周の日は試児の日に同じ。幼児が生後一カ年の誕生日に祝宴を設け、種々の物品を床上に安置し、幼児にそれらを弄ばしめ、何を選ぶかでその立身を下する日のことをいう。『顏氏家訓』卷上「風操篇第六」に「江南風俗、児生一期、為製新衣、盥浴裝飾。男則用弓矢紙筆、女則刀尺鍼縷、並加飲食之物及珍宝服玩、置之兒前。觀其發意所取、以驗貪廉愚智、名之為試兒。親表聚集、致讌享」

焉。自茲已後二親若在、每至此日、嘗有酒食之事耳。無教之徒、雖己孤露、其日皆為供、頓酣暢声乐、不知有所感傷。梁孝元、年少之時、每二月六日載誕之辰、常設齋講、自阮修容。薨歿之後、此事亦絶」とあり、江南の風俗として記載されている。  
儒釈の文籍…儒教と仏教に関する書物・書籍のこと。儒書と釈書。  
百玩…多くの玩具。百は多くの、衆多、概数を意味する。玩は玩具の意、

弄ぶもの、おもちゃにするもの。

釈書：仏書。釈典・仏典とも。釈氏の書。仏教経典や仏教に関連した書物のこと。

六七歳：祖元が六歳から七歳であったのは、紹定四年（一二三二）から紹定五年に当たっている。この時期、無準師範は宝慶三年（一二二七）春より明州鄞県の阿育王山広利寺の住持を勤めており、あたかも紹定五年の秋には勅を受けて杭州餘杭県の径山興聖万寿寺に陞住している。

家塾：私設の学校。私人の開いた学校。私塾・私学所。北宋代の僧侶である道温文登（如晦）が撰述した『湘山野録』巻上「異国五世同居者」の項に「尤著者江州陳氏（中略）別墅建家塾、聚書延四方学者、伏臘皆資焉、江南名士皆肄業於其家」とある。

疑問応対：疑問は疑い問うこと。応対は受け答えをすること。質問と応答。

童輩に穎出す：同じ年頃の童子たちより優れて抜け出ていること。少成の性：少成とは年少のときの習わし。性は天性。年少のときの習慣がやがて天性となる意として「少成は天性の若し」ということが存する。『孔子家語』卷一〇「七十二弟子解第四十四」に「二人迭侍左右。孟武伯見孔子而問曰、此二孺子之幼也、於学豈能識於壮哉。孔子曰、然、少成則若性也、習慣若自然也」とあり、『顔氏家訓』巻上「教子篇第二」に「孔子云、少成若天性、習慣如自然、是也」とある。

然、是也」とある。

（佐藤）

沈重木訥：沈重は落ち着いて重々しいこと、深沈厚重的意。木訥は無口で飾り気がないこと、質朴で口才がないこと。後に祖元の法孫に当たる夢窓疎石（夢窓正覚心宗普济国師、一二七五―一三五二）は自らを朴訥子と称している。

容貌：顔かたち。姿・見目。容姿・容状のこと。

英異：人並み優れていて並々でないこと。すぐれて賢いこと。

威像：猛く勇ましい姿かたち。威形・威勢に同じ。

奇傑：珍しく優れていること。すばらしく傑出していること。

姉ら姓親：祖元には姉もいたものらしい。姓親はうから・やから、親族のこと。ただし、禪林諸祖伝本では「姉妹婢妾姓親」とある。婢

妾は下女や側室のこと。

羶血：生臭い血。羶は羊の生肉のことで、生臭い意。

屠宰毛羽：屠宰は家畜などを殺して料理すること。割烹すること。毛羽は鳥の羽、または獣の毛と鳥の羽。

利生愛物：利生は衆生を利すること、人々に利益を授けること。愛物は物を愛すること、とくに生き物や草木を慈しむこと。

素蘊：素より積むの意か。蘊は積むこと、貯えること。

年十二：祖元が十二歳であったのは嘉熙元年（一二三二）に当たる。すでに日本の円爾（辨円、聖一国師、一二〇二―一二八〇）は入宋して三年目に至っており、径山の無準師範に参じて法語一篇を得て

いる。

父兄：父とは許伯済のことであるが、兄は俗兄で出家していた仲拳懐

然、是也」とある。

然、是也」とある。

然、是也」とある。

然、是也」とある。

然、是也」とある。

徳のことを指すか。

山寺：おそらく明州の鄞県地内の山間に存した寺院であろう。東銭湖や翔鳳郷の近隣に存した禅寺と見られるが、具体的な寺名は他の伝記史料でも定かでない。

竹影、階を掃いて塵は動かず、月は潭底を穿ちて水に痕無し：竹の影が殿閣の石の階段を掃っても塵は動かないし、月の光が湖や池の底まで貫いても水には跡形がない。無事の人の没跡なあり方を譬えたもの。『嘉泰普燈錄』卷八「潭州雲峰祖燈志璿禪師」の章に、雲門宗の法雲善本（小本、大通禪師、一〇三五—一〇九）の法嗣であ

### 〔父親の死去と浄慈寺北磻居簡のもとでの出家〕

年十三、遭父喪、師歎曰、幼失所怙勵志釋。秋七月、隨師兄、之臨安府、投浄慈寺出家。服勤者四月、冬十月、禮住持北磻簡禪師祝髮。當年受具足戒。

歎 嘆 志 志從 磻 潤

年十三にして、父の喪に遭い、師、歎じて曰く、「幼くして所怙を失う、励みて釈に志さん」と。秋七月、師兄に隨いて、臨安府に之き、浄慈寺に投じて出家す。服勤すること四月、冬十月、住持の北磻簡禪師を礼して祝髮す。当年に具足戒を受く。

年十三：祖元の十三歳は嘉熙二年（一二三二）に当たる。

父の喪：祖元の父親である許伯洛は嘉熙二年七月以前に逝去したことになろう。祖元が出家する動機として父の死が大きな影響を与えたことが窺われる。

る雲峰志璿（祖燈禪師）のことばとして「上堂。声色頭上睡眠、虎狼羣裏安禪、荆棘林内翻身、雪刃叢中游戯。竹影掃地塵不動、月穿潭底水無痕」（正統藏一三・七〇d）とあり、ほかにこの句の用例は多い。

默契：黙して契う。無言の中に心が一致すること。黙して真如と契うこと。  
俗に在るの意：在家に留まる心。在俗は俗世に在ること、出家しないで俗世間に居ること。

所怙：怙る所。依拠するところ。頼みとするところ。親・父母のこと。  
ここでは具体的に父親を指す。

励みて釈に志さん：精神を奮い起こして仏門に志すこと。釈とは釈氏や仏門、釈迦の一族の意で出家者のこと。勵志は志を励ますこと。

秋七月：嘉熙二年七月。おそらく夏安居の終了する七月一五日すなわち解制の以降のことであろう。

師兄：法兄・兄弟子。同門の年長者。ただし、ここでは祖元の実際の俗兄で先に出家していた仲拳懷徳のことであろう。『仏光国師語録』巻二「台州真如禪寺語録」の「往来偈頌」に「海中夜泊懷仲拳師兄」の偈頌（大正藏八〇・一四二a）を収めている。懷徳は嗣承が明確でないが、明州昌国県東四〇里の万松山延福寺に住持したことが知られる。

臨安府：南宋の国都、杭州（浙江省）のこと。南宋代には臨安府と称し、それまでの国都であった河南の開封府（汴京）を金国に奪われた宋朝としては、杭州を仮の国都の意で行在所となしている。

浄慈寺：杭州钱塘县西南三里の西湖南岸に位置する南屏山浄慈報恩光孝禅寺のこと。五代周の顯徳元年（九五四）に呉越王が創建して慧日永明院と称し、法眼宗の永明延寿が住して『宗鏡録』一〇〇巻を撰したことで名高い。北宋代には雲門宗の円照宗本や大通善本などが住持し、南宋初期に浄慈報恩光孝禅寺と改められる。南宋中期には五山第四位に列し、曹洞宗の長翁如浄や大慧派の北磻居簡、松源派の石林行輩などが住持している。寺志として『勅建浄慈寺志』三〇巻が存する。

出家：俗家を出て剃髮染衣して沙門となること。得度のこと。ただし、ここでは単に仏門に投じた意で用いている。

服勤すること四月：浄慈寺に投じて七月から一〇月までの四ヶ月の間

は童行（沙弥）の身で僧侶としての基本などを習得していたものであろう。服勤は服勞、骨折りの仕事に従い勤めること。勤苦に服務すること。

冬十月：嘉熙二年一〇月に当たる。祖元が杭州の浄慈寺に投じた後、正式に住持の北磻居簡のもとに参じた記念すべき月である。

住持：寺院の住職。浄慈寺は五山第四位の寺格であるため、住職は朝廷からの勅帖（黄勅）によって任命される。

北磻居簡：臨濟宗大慧派の北磻居簡（敬叟、一一六四―一二四六）のこと。潼州（四川省）の龍氏。明州（浙江省）阿育王山の拙庵徳光に参じて法を嗣ぐ。台州（浙江省）の般若禅院や巾子山報恩光孝禅寺に住持した後、湖州（浙江省）の思溪円覚寺や道場山護聖万寿寺などを経て杭州の浄慈寺に陞住する。淳祐六年四月一日に世寿八三歳で示寂する。詩僧として名高く、『北磻和尚語録』一卷のほか、詩文集として『北磻文集』九卷、『北磻詩集』九卷、『北磻外集』一卷などが存し、その作品は模範とすべき禅僧の漢詩文として日本の五山文学にも大きな影響を与えている。『物初贖語』巻二四「行状」に法嗣の物初大観が撰した「北磻禪師行状」を収める。

祝髮：髪を剃ること。剃髮・薙髪とも。ここでの祝は断つ、断ち切る、切断するの意。

当年に具足戒を受く：具足戒は比丘・比丘尼の保つべき戒律。『四分律』によれば、比丘（男僧）は二五〇戒を受け、比丘尼（女僧）は三四八戒を受けることになっている。ただし、当年とあるから、出家得度



した嘉熙二年の年内ということなり、一〇月以降に祖元は十三歳で  
受戒したことになる。比丘・比丘尼は一人前の僧ということで大

僧と称せられる。

### 「径山の無準師範との機縁」

十四歳、登徑山、見無準師範禪師。十七歳、參狗子無佛性話。不出僧堂者五年、懵無所入。師每嘆曰、吾出家初志不酬、於道未明、  
茫茫然失意者半載。一夜四更、聞首座寮前版響、發明己事。遂作頌曰、一槌打碎精靈窟、突出那吒鍱面皮、兩耳如聾口如啞、等閑  
觸著火星飛。呈無準、準少可之。而準亦示以香巖擊竹頌。師不契。

不酬 未酬 版一板 打一擊 鍱一鍱

十四歳にして、徑山きんざんに登り、無準ぶじんはん師に見ゆ。十七歳にして、「狗子無佛性」の話に參ず。僧堂を出でざること五年、懵もろくして所入しよにやう無し。  
師、毎に嘆じて曰く、「吾が出家の初志しよし酬むくはず、道に於いて未だ明らめず、茫茫ぼぼぼうぜん然として失意すること半載なり」と。一夜四更、  
首座寮しよざうの前版の響きを聞きて、己事こじを發明はつめうす。遂に頌を作りて曰く、「一槌ひとづちに精靈窟しやうりやうくわうを打碎し、那吒なたの鍱くわう面皮めんひを突出す。兩耳りやうじは聾なうの如く口は啞おの如し、等閑とうかんに觸著ふすれば火星飛ぶ」と。無準に呈するに、準少しく之れを可とす。而して準亦た示すに「香巖きやうがん擊竹げきちく」  
の頌を以てす。師、契あはわず。

十四歳：祖元の十四歳は嘉熙三年（一二三九）に当たる。この年一月  
には徑山の無準師範に南宋の理宗から仏鑑禪師の勅号が下賜されて  
いる。円爾が徑山の師範のもとから日本に帰国するのが淳祐元年  
（一二四一）のことであるから、祖元と円爾は三年間は同じ徑山に在っ  
てともに師範に參学していたことになる。嘉熙三年の時点では円  
爾はすでに三八歳であり、祖元とは二五歳の開きが存する。

徑山：杭州（浙江省）餘杭県西北五〇里の徑山興聖万寿禪寺のこと。

唐代に牛頭宗の道欽（国一國師）が住庵し、大曆四年（七六九）に  
徑山寺となる。北宋末期に能仁禪寺と称され、南宋初期に楊岐派の  
大慧宗杲が住持して修行僧一五〇〇人を擁する大刹となった。孝宗  
より興聖万寿禪寺の勅額を賜わり、理宗の代には禪宗五山の第一位  
に列する。南宋後期には破庵派の無準師範や松源派の石溪心月・虚  
堂智愚などが住持し、道元・円爾・南浦紹明など多くの日本僧も參  
学を訪れている。寺志に「徑山志」一四卷が存する。

無準範禪師：臨濟宗破庵派の無準師範（仏鑑禪師、円照、一一七七—一二四九）のこと。劍州（四川省）梓潼県の雍氏。楊岐派（破庵派祖）の破庵祖先の法を嗣ぐ。明州の清涼広慧寺・雪竇山資聖寺・阿育王山広利寺の住持を経て、杭州の径山興聖万寿寺に陞住する。二度の火災に遭うも、伽藍を復興して径山の発展に尽力し、理宗より仏鑑禪師の勅号を受ける。多くの門人を育成し、円爾（聖一・国師）ら日本僧の法嗣も存する。淳祐九年三月一八日に世寿七三歳（一説に七二歳）で示寂する。『仏鑑禪師語録』五巻が刊行され、伝記として徳如撰『大宋国臨安府径山興聖万寿禅寺住持特賜仏鑑禪師行状』（東福寺所蔵）と『無文印』巻四「径山無準禪師行状」という二種の行状があり、『後村先生大全集』巻一六二「径山佛鑑禪師」の墓誌銘も存する。『仏光国師語録』巻八「仏祖讚」には「無準和尚」の祖讚二首（大正蔵八〇・二二八c）を収めている。

十七歳：祖元の十七歳は淳祐二年（一二四二）に当たる。この年二月に径山が師範の代として再び火災で焼失している。

狗子無仏性の話：南泉下の趙州從諗（真際大師、七七八—八九七）が示した古則公案。趙州狗子・趙州無字とも。『趙州真際禪師語録』巻上「示衆上堂」に「問、狗子還有二仏性也無。師云、無。学云、上至二諸仏、下至二螻子、皆有二仏性。狗子為二什麼無。云、為二伊有二業識性」在（卍統蔵一・一八・一五七c）として載るが、『無門関』第一則「趙州狗子」に「趙州和尚因僧問、狗子還有二仏性也無。州云、無」（大正蔵四八・二九二c）とあることよって一般に知られる。

僧堂：聖僧堂の略。雲堂・枯木堂・選仏場なども称する。禪の修行道場で修行僧（雲水）が坐禅・食事・睡眠をする建物。

五年：一七歳から二二歳に至る五年間のこと。祖元の二二歳は淳祐六年（一二四六）に当たる。同じ淳祐六年四月一日に祖元の受業師であった北礪居簡が世寿八三歳で示寂している。

憎くして所入無し：憎は暗い、心が暗いさま。所入は入るところ、悟りに入るところ。

出家の初志：出家したときの最初の志し。出家の本願。

茫然然：ぼうつとして取留めのないさま。疲れているさま。茫然としていいるさま。

失意：自分の思ったようにならず、くよくよすること。思惑が外れてむしやくしやすること。

半載：半歳。半年間のこと。載は年・歳に同じ。

一夜四更：一夜はある夜。四更は午前一時から午前三時の頃に当たる。更は夜を初更から五更まで五等分した時刻で、四更はその第四番目。

首座寮の前版の響き：首座寮は禅寺の首座（第一座）が起臥する寮舎。前版は前板、首座寮の前に掛ける木製の鳴物、木版のこと。道元の『永平辨道法』によれば、禅寺では後夜（明け方）に首座寮の前板が鳴るのを聞いて起床する。

己事を発明す：己事は自己の一大事、自己存在の本義。発明は明らかに徹見すること、悟りを開くこと。

頌：梵 *śloka* の音写。伽陀・偈陀。偈頌のこと。仏法などを讀えた韻文（漢

詩)のこと。

一槌…一撃を食らわすこと。一打ちすること。槌は槌砧。槌は砧を打つて鳴らす法具。

精靈窟…怪しげな物の怪の住む洞窟。精靈は死者の靈魂、物の怪。窟は洞窟・穴蔵。ここでは禅修行において陥る誤った境涯をいう。禅病の類いを指す。

打碎…打破すること。打ち砕くこと。

那吒の鏡面皮…那吒太子は毘沙門天(北方多聞天)の子であり、三面六臂で恐ろしい形相をしている大力の鬼王。鉄面皮は鉄製の面、面の皮の厚いこと、太々しいさま、厚かましいさまをいう。『風穴禪師語録』の「上堂」に「問、滿目荒郊翠、瑞草却滋榮時如何。師曰、新出紅爐金彈子、筵破關黎鉄面皮」(卍統藏一一八・二二〇c)とある。

両耳は聾の如く口は啞の如し…二つの耳は聞こえないようになり、口はものが言えないようである。聾は耳の聞こえないこと。啞はことばを発することができないこと。

等閑…なござりに。いい加減に。何となく。

火星飛ぶ…火花が飛ぶこと。火星はここでは火花、火の粉の意。

香巖…瀉山下の香巖智閑(龔燈禪師、?—八九八)のこと。智閑は久

### 〔石溪心月と偃溪広間の指導を受ける〕

既而無準示寂。卽下靈隱、見石谿月禪師。明年見偃溪閑於育王。松源普説、看打牛車話、頓忘所得。再下淨慈、偃谿職師知藏。

偃溪歸淨慈、復招師爲記室。師避不就。次第再上徑山見石溪。偶閑

無学祖元の伝記史料—無象静照撰『仏光禪師行状』の訓註—(佐藤)

しく瀉山靈祐に参学していたが、そのもとを辞して襄陽(湖北省)武当山で六祖下の南陽慧忠(大証国師、?—七七五)の遺跡で庵居する。一日、撃竹悟道の機縁によつて靈祐の法を嗣ぐ。鄧州(河南省)の白崖山香巖寺に住持する。金沢文庫所蔵『香巖頌』一卷など、詩偈二〇〇余首が存し、詩偈の名手として知られる。光化元年に示寂したとされるが、世寿は定かでない。『祖堂集』巻一九、『景德伝燈録』巻一一、『宋高僧伝』巻一三、『聯燈会要』巻八などに伝が存する。

撃竹頌…香巖智閑が示した悟道の偈頌。智閑は瀉山靈祐のもとで久しく参禅修行していたが、悟るところがなかったため、そのもとを辞して襄陽(湖北省)武当山で南陽慧忠の墓塔の墓守(守塔比丘)をしていた。あるとき帚で掃除をしていた折、弾いた礫が竹に当たった音を聞いて道を悟ったとされる。その際に智閑は自ら悟道の境地を偈頌に詠じている。『聯燈会要』巻八の香巖智閑章によれば、悟道の偈頌は「乃述偈云、一撃忘所知、更不自修治、動容揚古路、不墮三情然機。处处無蹤跡、声色外威儀、諸方達道者、咸言上上機」(卍統藏一三六・二八三c)と記されている。この古則は『香巖撃竹悟道』とか『香巖聞声悟道』あるいは単に『香巖撃竹』と称される。

既—即 聞—聞禪師 歸—皈 闍—闍 所得—所得是年二十六矣 偃谿—偃谿

既にして無準示寂す。即ち靈隱に下りて、石谿月禪師に見ゆ。明年、偃谿聞に育王に見ゆ。偃谿、淨慈に帰り、復た師を招きて記室と爲す。師、避して就かず。次第、再び径山に上りて石谿に見ゆ。偶たま松源の普説を閲し、「打牛車」の話を見、頓に所得を忘す。再び淨慈に下るに、偃谿、師を知蔵に職てしむ。

無準示寂：無準師範は淳祐九年（一二四九）三月一八日に世寿七三歳（一説に七二歳）で示寂している。しかもこの淳祐九年三月一八日は祖元の満二三歳の誕生日に当たっていることから、祖元にとつても忘れ得ぬ日であったと見られる。師範の後席を継いで同年八月に径山に住持したのは曹源派の癡絶道冲であるが、道冲も淳祐一〇年五月一三日に世寿八二歳で示寂している。祖元が径山で師範に参学していた期間は一四歳から二四歳までの一年間であったことにならう。靈隱：杭州钱塘県西北の靈隱山（武林山）に存する北山景德靈隱禪寺のこと。古くインド僧慧理が訳経に従事した地とされる。五代に呉越王が五百羅漢を安置して法眼宗の永明延寿（智覚禪師）を拜請して堂宇を整え、北宋代に景德靈隱禪寺と称する。南宋代には臨済宗楊岐派の瞎堂慧遠や松源崇嶽などが住持し、禪宗五山の第二位に列する。光緒一四年（一八八八）刊行の『靈隱寺志』八巻が存する。靈隱に下るとあるのは、五山第一位の径山より第二位の靈隱寺が寺格の低いことを意味する。

石谿月禪師：臨済宗松源派の石谿心月（仏海禪師、一一七七？—

一二五六）のこと。眉山（四川省）青神の王氏。松源下の掩室善開の法を嗣ぐ。諸刹を歴住し、蘇州（江蘇省）の虎丘山雲巖寺から杭州の靈隱寺に遷住し、さらに径山に陞住する。宝祐四年（一二五六）四月頃に世寿八〇歳前後で示寂したと推測される。晩年に仏海禪師の勅号を賜う。『石谿和尚語録』三巻が存する。法嗣に日本に渡来した大休正念（仏源禪師、一二一五—一二八九）がおり、日本の無象静照も入宋して心月の法を嗣いで帰国し、後に無学祖元のために本行状を撰している。

明年：淳祐一〇年（一二五〇）に当たる。この年五月一三日に径山の癡絶道冲が八二歳で示寂し、六月に靈隱寺の石谿心月が径山住持の請を受けている。

偃谿聞：臨済宗大慧派の偃谿広聞（仏智禪師、一一八九—一二六三）のこと。福州（福建省）侯官県の林氏。大慧派の浙翁如琰の法を嗣ぐ。諸刹を歴住し、明州の阿育王山広利寺や杭州の南屏山淨慈寺・北山靈隱寺を経て径山万寿寺に住持している。景定四年六月一四日に世寿七五歳で示寂。仏智禪師と諡される。『仏智禪師偃谿和尚語録』二巻が存する。

『竹溪處齋十二稿統集』卷二に林希逸が撰した「徑山偃溪仏智禪師塔銘」があり、語録の卷末にも「塔銘」として収録される。『仏光國師語録』卷八「仏祖讚」に「偃溪和尚」の祖贊二首（大正藏八〇二一八c）が収められている。

育王：明州（浙江省）鄞東五〇里の阿育王山広利禪寺のこと。古くインドの阿育王（アショーカ王）が建てた舍利塔の地の一つとされ、晋の義熙元年（四〇五）に伽藍が建てられたと伝えられる。北宋代に広利禪寺と賜い、雲門宗の大覚懷瓊らが住持する。南宋代には楊岐派（大慧派）の大慧宗杲・妙智從廓・拙庵徳光らが住して舍利殿および仏舍利塔を整備する。南宋中期に禪宗五山の第五位に列し、無準師範も数年間にわたり住持している。寺志として『明州阿育王山志』一〇巻と『明州阿育王山統志』六巻が存する。『仏智禪師偃溪和尚語録』卷末「塔銘」に「戊申移育王」とあるから、偃溪広間が阿育王山に住持したのは淳祐八年（一二四八）であり、淳祐一年まで四年間にわたって住持を務めていたことが知られる。

偃溪、浄慈に帰り：『仏智禪師偃溪和尚語録』卷末「塔銘」に「辛亥移浄慈」とあるから、偃溪広間が明州の阿育王山から杭州の浄慈寺に住持したのは淳祐一年（一二五一）であったことが知られる。このとき広間の後席を継いで阿育王山に住持したのは曹洞宗宏智派の東谷妙光（？—一二五三）である。

記室：書記のこと。六頭首の一。禪寺で書疏の製作などを掌り、首座（第一座）を補佐する。

再び徑山に上りにて石溪に見ゆ：石溪心月が靈隠寺から徑山に遷住したのは淳祐一〇年六月のことであり、心月の後席を継いで靈隠寺に住したのは大慧派の大川普済である。

松源：臨濟宗虎丘派（松源派祖）の松源崇嶽（老聶翁、一一三二—一二〇二）のこと。処州（浙江省）龍泉松源の呉氏。密庵成傑の法を嗣ぐ。蘇州（江蘇省）陽山の澄照寺に出世し、諸刹を歴住した後、蘇州虎丘山雲巖寺から杭州靈隠寺に陞住した。嘉泰二年八月四日に世寿七一歳で示寂する。『松源和尚語録』二巻が存する。『渭南文集』卷四〇と『松源和尚語録』卷末に陸游が撰した「松源禪師塔銘」が収められる。運庵普巖・掩室善開・無得覚通・無明慧性・滅翁文礼など多くの法嗣を育成した。松源派の流れを日本に伝えた崇嶽の法孫としては、蘭溪道隆・大休正念・無象静照・南浦紹明・西澗子曇・桂堂瓊林・明極楚俊・竺仙梵僊・月林道皎・石室善玖・愚中周及・以亨得兼らが存する。

普説：寺内の修行僧に普く説き示す法語。普く正法を説いて人々を導く意。松源崇嶽の普説とは『松源和尚語録』卷下「秉弘普説」に載る第四番目の普説のこと。

打牛車の話：南嶽懷讓（大慧禪師、六七七—七四四）と馬祖道一（大寂禪師、七〇九—七八八）の間で交わされた「磨瓶作鏡」の古則につづく問答。『松源和尚語録』卷下「秉弘普説」に載る第四番目の普説に「又讓和尚示馬祖、譬如牛駕車、車若不<sub>レ</sub>行、打<sub>レ</sub>牛即是、打<sub>レ</sub>車即是。馬祖當時便悟去、却商量道、車<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>身、牛<sub>レ</sub>喻<sub>レ</sub>心、有<sub>二</sub>甚

交渉。但是仏祖直截為人処、一時錯會。如レ此見解、自誤誤レ佗、不可「勝教」(正統蔵一二・三〇八b)とあるのがこれに相当する。妙心寺の桂春院に松源下の無明慧性(一一六〇—一二三七)が最晩年の嘉熙元年(一二三七)に揮毫した「松源普説語」一幅(重要文化財)が所蔵されているが、そこでも「打牛車」の話が取り上げられてゐる。

頓に所得を忘す…所得は所見・見解。ここでは物事を二つに分けて、一方を取つて一方を捨てようとする分別心のこと。ここでは忽ちに

分別心を忘れて真意を悟つたことをいう。禅林諸祖伝本ではこのとき二六歳であつたとするから、淳祐十一年(一二五一)のできごとであつたことにならう。  
再び浄慈に下る…浄慈寺は五山第四位であるから、第一位の径山を下つて下位の浄慈寺へと赴いたことになる。  
知蔵…蔵主のこと。六頭首の一。寺院に所蔵される経論を管理する職位。蔵殿の主管。

〔鷺峰庵の虚堂智愚のもとで悟道する〕

既歸・移居靈鷲。時往鷺峰菴中、參扣虚堂愚禪師、特示禪海波瀾。師茫茫然不知涯涘。虚堂一日送僧頌示師。師熟看了曰、和尚、此頌都是閑説、中間都無些子禪。堂拈起頌子云、這箇響。師欲答、堂劈面一揮。師當下脱然器之。

歸—皈 菴—庵 涘—儉 頌—ナシ 閑—閑 劈—擘

既に歸りて靈鷲に移居す。時に鷺峰菴中に往き、虚堂愚禪師に參扣するに、特に禅海の波瀾を示す。師、茫茫然として涯涘を知らず。虚堂、一日、「僧を送る頌」もて師に示す。師、熟看了りて曰く、「和尚、此の頌は都是れ閑説なり、中間に都て些子の禪無し」と。堂、頌子を拈起して云く、「這箇、響」と。師、答えんと欲るに、堂、劈面に一揮す。師、当下に脱然として之れを器とす。

靈鷲…靈隱寺の正面にある案山の名。インドの靈鷲山から飛來したと

武林山之第一峰也」とある。

言い伝えられ、武林山(靈隱山)の第一峰とされる靈鷲峰のことで

移居…居を移す。居所を他地に移す。

飛來峰とも称する。『靈隱寺志』卷一「武林山水」に「飛來峰、即靈鷲峰也。為「靈隱寺案山」、以「竺僧理公」得レ名。高五十餘丈。(中略)

鷺峰菴…武林山の一峰である北高峰の麓に存した松源崇嶽の塔頭(廟所)の名。『靈隱寺志』卷二「古塔」の「南宋塔」によれば「松源禪師塔、

在「北高峰麓」とあり、『渭南文集』卷四〇に所収される「松源禪師塔銘」に「因書レ偈曰、来無レ所来、去無レ所去、警レ転玄闕、仏祖因レ措。脚跌而寂。実嘉泰二年八月四日也。得年七十有一、坐夏四十。奉ニ全身、塔ニ於北高峰之原」と記されている。『松源和尚語録』巻末に載る松源派の古林清茂（金剛幢、一二六二—一三二九）がなした語録重刊の跋文に「臨濟十四世孫松源和尚語録板留ニ靈隱鷲峰菴。至元年間、菴既回祿、板亦隨燼。衲子慕レ之而不レ可得」（中統藏一二二—一六b）とあることから、元の至元年間（一二六四—一二九四）には南宋末元初の動乱で鷲峰庵も火災に遭遇したものらしい。

虚堂愚禪師：松源派の虚堂智愚（息耕叟、一一八五—一二六九）のこと。明州象山県の陳氏。松源下の蓮庵普巖の法を嗣ぐ。諸刹を歴住して後、明州の阿育王山広利寺、杭州の南屏山淨慈寺、径山興聖万寿寺に住する。咸淳五年一〇月に世寿八五歳で示寂する。『虚堂和尚語録』一〇巻が存し、末尾に法嗣の閑極法雲が撰した「行状」を取める。智愚の法を伝えて日本に帰国した法嗣に南浦紹明（円通大応国師、一二三五—一三〇八）と巨山志源が存し、とくに紹明の流れである大応派は大徳寺派と妙心寺派を形成し、現今の日本臨濟宗の源流となる。『仏光国師語録』卷八「仏祖讚」に「虚堂和尚」の相賛二首（大正藏八〇・二一八c—二一九a）が存し、とくに最初の祖讚には「法光寺殿夢見、次日求レ贊」という付記が存し、北条時宗が贊を依頼している。同じく卷八「偈頌」に「因觀」阿育王諸兄頌ニ虚堂和尚歳夜示衆、成レ軸、亦随喜述ニ此四頌」の偈頌四首（大正藏八〇・二二一

a—b）を収めているから、智愚が阿育王山広利寺でなした歳夜示衆の頌軸にも祖元が偈頌を寄せていることが知られる。また智愚の晩年の法嗣である靈石如芝は後に杭州の南屏山淨慈報恩光孝禪寺の住持となり、無学祖元のために「無学禪師行状」を撰している。

参叩：参叩に同じ。門を叩いて参ずること。門下に投じて教えを受けること。虚堂智愚は淳祐九年（一二四九）に婺州（浙江省）義烏県の雲黄山宝林寺（双林）の住持を退いてより、宝祐四年（一二五六）四月に明州鄞県の阿育王山広利寺に入寺するまで、足掛け八年間にもわたって北高峰の鷲峰庵に閑居し、「虚堂三転語」をもつて学人を接化している。智愚の「行状」や『虚堂和尚語録』卷四「靈隱立僧普説」（大正藏四七・一〇一五a—一〇一七a）によれば、この間、智愚は靈隱寺の住持であった曹洞宗宏智派の東谷妙光（？—一二五三）に招かれて寺内で立僧普説を行なっている。

禅海の波瀾：禅海は禅の教えの深さを大海に譬えた表現。波瀾は大波小波。ゴタゴタした揉め事の譬えにも用いる。

茫茫然：前出。ただし、ここでは広々と果てしないさま。

涯涘：渚・水ぎわ。果てや限りの意にも用いる。涯際・涯限。

僧を送る頌：『虚堂和尚語録』卷七「偈頌」に「衍輩珙三禅徳之「国清」として載る偈頌を指しており、偈頌の内容は「誰知三隱寂寥中、因レ話尋レ盟別ニ鷲峯」。相送当レ門有レ脩竹一、為レ君葉葉起ニ清風」（大正藏四七・一〇三七c）という七言四句。これを訓読すれば「衍・輩・珙の三禅徳、国清に之く」に「誰か知らん、三隱寂寥の中、話に因

りて盟を尋いで鷲峯に別れんとは。相い送るに門に当たたりて脩竹有り、君が為めに葉葉、清風を起こす」となる。同じ松源下の滅翁文礼(天目樵者、一一六七—一二五〇)の門下であった水谷□衍(一一二六七)・石林行葦(一一二〇—一二八〇)・横川如珙(一一二二—一二八九)の三禪者が鷲峰庵の智愚に参じていたが、ときに台州(浙江省)天台県の天台山国清寺に赴くことになり、智愚が彼らを送る偈頌を詠じている。智愚は三禪徳のことを唐代に「国清三賢」と称された豊干・寒山・拾得という三隱者に準えている。なお、□衍とあるのを水谷□衍ではなく、同じ松源派で智愚の法弟に当たる石帆惟衍(？—一二七二?)のことでであると記す史料もあるが、これは明らかでない。

熟看：熟視に同じ。十分に注意して見る。詳しく読む。じつくりと黙読する。

間説：閑話・閑談・閑語に同じ。無駄話のこと。無意味・無内容なことば。

### 〔明州大慈寺の物初大観のもとでの研鑽〕

次年、東旋大慈、于時物初觀主席。師爲衆持淨者二載、因看妙癡禪普説。次日躡井樓打水、牽動轆轤、大發無碍機用。而無準向所示香嚴擊竹頌及狗子無佛性話、於斯頓絶消息。是年三十六矣。當年、物初請歸後版。

歸—版 版—板

次年、東のかた大慈に旋り、時に物初觀、席を主る。師、衆の爲めに持淨すること二載、因みに妙癡禪の普説を見る。次の日、井樓を躡りて水を打ち、轆轤を牽動するに、大いに無碍の機用を發す。而して無準が向きに示す所の「香嚴擊竹」の頌及び「狗子無佛性」

間は閑に同じく、暇・静かの意。

些子の禪無し：僅かばかりの禪旨もない。智愚の偈頌に宗旨が込められていないと批判する意。些子は少し、ちよつと。

頌子：偈頌のこと。偈頌とは仏徳や禪旨を詠じた僧侶による韻文の詩。

子は助字。特に禪僧による漢文の詩のこと。詩偈とも。

拈起：手で摘むこと。摘まみ上げること。取り上げること。

這箇響：這箇は者箇・遮箇とも。これ・この。響は詰問の意を込めた余声。反問したり注意を促すことば。「これは何だ」「これはどうだ」と迫る意。

劈面：真つ向から、真正面から、まともに。

一揮：一度、手を振り回す。手を一振りする。

当下：即座に、即時に、その場で。立ちどころに。

脱然：迷いなどからさっぱりと抜け出るさま。心が伸び伸びするさま。

身心が脱落するさま。



の話、斯に於いて頓に消息を絶す。是の年、三十六なり。当年、物初、請して後版ごはんに帰す。

次年：正確な年時が確定できない。祖元の「告香普説」によれば、鶯峰庵の虚堂智愚のもとを辞して後、祖元は明州鄞県の天童山景德寺に掛搭しており、その後と同じ鄞県の大慈山教忠報国寺に赴いて物初大観に参じている。

大慈：明州鄞県東五〇里の大慈山下の教忠報国禅寺（大慈寺）のこと。東銭湖から五里ほど離れた下水巖に存する。嘉定三年（一二二〇）に丞相の史彌遠が建立して功德寺（家刹）となし、大慧派の笑翁妙堪を開山始祖に拜請している。その後も破庵派の独庵道儒や大慧派の芝巖慧洪・物初大観らが住持し、甲利の一に列している。明の洪武年間（二三六八―二三九八）に松源派の天宇宝定（南宗禅師）によって重建されており、寺の変遷は『敬止録』卷二九「寺観考四」の「大慈禅寺」の項に詳しい。道元の弟子である曹洞宗の寒巖義尹（法王長老、一二一七―一三〇〇）が宝祐元年（一二五三）に日本から入宋した際に明州の大慈寺を訪れてその景勝を愛し、後に肥後（熊本県）河尻に大梁山大慈禅寺（大慈寺）を創建したのは名高い。

物初観：大慧派の物初大観（一二〇一―一二六八）のこと。明州鄞県横溪の陸氏。無学祖元とは姻戚関係にあったとされる。北磻居簡の法を嗣ぐ。諸刹を歴住して後、明州象山県の智門寺から明州鄞県の大慈山教忠報国寺に遷住し、景定四年（一二六三）に阿育王山広利寺に陞住する。咸淳四年六月一七日に世寿六八歳で示寂する。「物初和

尚語録」一巻のほか、詩文集「物初贖語」二五巻が存し、当時、本師の北磻居簡や同じ大慧派の無文道璨（一二一四―一二七二）らとともに詩僧として名声を馳せた。「明州阿育王山志」卷八「塔銘」に法嗣の晦機元熙が撰した「鄞峰西菴塔銘」が存する。同じく法嗣の用潜覚明は無学祖元のために「無学禅師行状」を撰している。「弘光国師語録」卷二「台州真如禅寺語録」の「往来偈頌」に「寿」物初師兄」の偈頌（大正蔵八〇・一四二c）と「慈雲諸公作」頌、美「玉几物初和尚作塗之功、亦随喜二偈」の偈頌（大正蔵八〇・一四二c）も収められている。

衆の爲めに持浄すること二載：衆は寺内の大衆すなわち修行僧たちのこと。持浄は東司・西浄など廁を掃除する役。浄頭のこと。祖元は二年間にわたってトイレ掃除の職位を行なったことになり、浄頭の職が祖元にとつて貴重な修行となったものらしい。

妙癡禅：南宋初期に活躍した雲門宗の癡禅元妙（一一二一―一一六四）のこと。元妙は婺州（浙江省）東陽の王氏。雲門宗の寂室慧光（石室光仏子）の法を嗣ぐ。台州（浙江省）の靈石寺に開堂し、諸刹を経て杭州の中天竺寺や靈隠寺に住して盛んに雲門の宗風を振つた。隆興二年七月一日に世寿五四歳で示寂する。「嘉泰普燈録」卷二七「臨安府中天竺癡禅元妙禅師」の章や「叢林盛事」卷下「癡禅妙禅師」の項に伝が存する。法嗣の可庵柔衷（仏慧禅師）は臨済宗楊岐派の大慧宗果

の後席を継いで杭州の径山に住持している。

普説：癡禪元妙の「普説」については定かでないが、当時、かなり知られた評判の普説であったものと見られる。「仏光国師語録」巻九「円覚開山仏光円満常照国師拾遺襍録」に載る守塔比丘光一編「告香普説」で祖元は「穠後帰三天童。次季帰大慈。第三季作浄頭。因看妙癡禪普説、出到井楼打水、牽動轆轤、不覺、百千三昧皆在浄頭」(大正蔵八〇・二二八b-c)と述べているから、おそらく元妙の普説も浄頭か井楼に関わる内容であったと見られ、祖元にとって重要な転機となつた説示といえよう。

井楼を躡りて水を打み：井楼は井戸の井桁。井戸の上に設けた欄干。躡は登ること、足で踏んで登ること。『趙州實際禪師語録』巻上に「師在二南泉井楼上」打水次、見二南泉過、便抱柱懸却脚云、相救相救。南泉上二梯梯云、一二三四五。師少時間、却去礼謝云、適來謝二和尚相救二(中統蔵二一八・二五三d)という井楼での打水に因む機縁が

〔参学した禪者と道交を結んだ朋友〕

師徧歴癡絶・天目・石溪・大川・虚堂・偃溪洎諸老之門、激揚歎密言論風旨多矣。交肩者皆江湖英傑、象潭・石林之儔也。師道聲藹然洽於叢林皆聞焉。

師、癡絶・天目・石溪・大川・虚堂・偃溪洎諸老の門を徧歴し、激揚は歎密にして言論にて風旨すること多し。肩を交える者は皆な江湖の英傑にして、象潭・石林の儔なり。師の道声は藹然として叢林に洽く、皆な焉れを聞く。

知られる。

轆轤：井戸の水桶を巻き上げる装置。回転させると綱が軸に巻き上げられる。

牽動：引つ張つて動かす。綱を引き動かす。

無碍の機用：無碍は無礙。妨げるものなく自由なさま。機用は機根とはたらき。力量とその活作略。

頓に消息を絶す：忽ちに跡形を絶する。急に音信が途絶える。

是の年、三十六なり：祖元が三十六歳であったのは南宋の景定二年(一二六一)に当たる。

当年：景定二年のことか。この年の夏安居(制中)の際に祖元は大慈寺の大観より後堂に任せられたものであろう。

後版：後板。後堂首座・後堂のこと。僧堂内を聖僧龕を中心に前後に

二分し、後門による後半部分をいう。後堂首座がこれを管理することから、単に後堂ともいう。

師、癡絶・天目・石溪・大川・虚堂・偃溪洎諸老の門を徧歴し、激揚は歎密にして言論にて風旨すること多し。肩を交える者は皆な江湖の英傑にして、象潭・石林の儔なり。師の道声は藹然として叢林に洽く、皆な焉れを聞く。

癡絶：虎丘派（曹源派祖）の癡絶道冲（一一六九—一二五〇）のこと。  
武信（四川省）長江の荀氏。曹源道生（？—一九八）の法を嗣ぐ。  
諸刹を歴住して明州の天童山景德寺に住し、一時期、阿育王山広利寺の住持を兼ねる。杭州の靈隱寺に住した後、無準師範の後席を継いで杭州の徑山に陞住する。淳祐一〇年五月一三日に世寿八二歳で示寂する。無準師範・笑翁妙堪らとともに淳祐年間を代表する禪者として名声を馳せた。『癡絶和尚語録』二巻が存し、超若据の撰した『行状』を収める。元朝の使僧として日本に渡來した一山一寧は道冲の法孫に当たる。『仏光國師語録』巻八「仏祖讚」に「癡絶和尚」の祖讚（大正蔵八〇・二二八c）を収めている。

天目：松源派の滅翁文礼（天目樵者、一一六七—一二五〇）のこと。杭州臨安県の阮氏。松源崇嶽の法を嗣ぐ。杭州の広寿寺、温州の雁蕩山能仁寺、杭州の淨慈寺、明州の天童山に住持する。淳祐一〇年一〇月一〇日に世寿八四歳で示寂する。法嗣に冰谷（衍・石林行鞏・横川如珙・雪蓬慧明らが輩出し、彼らは祖元とも親しく道交を結んだ。文礼には「天目禪師語録」が編集刊行されたが、現今に伝えられない。『天童寺志』巻七に徳雲撰「天目禪師行状」を収める。元代に活躍した法孫の古林清茂（金剛幢）のもとには多くの日本僧が参集したことで知られ、日本の五山文学に大きな貢献をなしている。  
石溪：石溪心月のこと。前出。

大川：大慧派の大川普濟（一一七九—一二五三）のこと。明州奉化県の張氏。浙翁如琰（仏心禪師）の法を嗣ぐ。明州奉化県の大中岳林寺

無学祖元の伝記史料—無象静照撰『仏光禪師行状』の訓註—（佐藤）

（布袋道場）など諸刹を歴住して後、明州鄞県の大慈山教忠報国寺を経て、杭州の淨慈寺や靈隱寺に陞住する。宝祐元年正月に世寿七五歳で示寂する。『大川和尚語録』一巻が編集刊行されており、「物初贖語」巻二四に「大川禪師行状」を収める。松源派の滅翁文礼の法嗣である雪蓬慧明（友雲、一二二六—？）が靈隱寺の普濟のもとで『五燈会元』三〇巻を編纂したことは名高い。  
虚堂：虚堂智愚のこと。前出。  
偃溪：偃溪広聞のこと。前出。

徧歴：徧歴とも。徧く諸方を訪ねて参禅辨道に励むこと。諸山を行脚歴遊すること。徧参。

激揚：励まされて奮い立つこと。感動して発憤すること。激しく揚げる、宗旨を拳揚すること。

款密：款密に同じ。親密なこと。款は款の俗字で、親しむ、よしみの意。言論：ことば・議論のこと。また言うこと、議論すること。

風旨：考えを論ず。考えをそれとなく告げる。風指、諷指。  
肩を交える者：友として付き合う者。よしみを通じて友となった者。肩を付き合わせて交友を結んだ者。

江湖の英傑：江湖は江西と湖南、長江と洞庭湖。世間・天下・世の中の意。また禅の修行道場、叢林のこと。英傑は優れた人物、ここでは優れた禅僧のこと。

象潭：松源派の象潭濡泳のこと。四明（明州）の人。雪竇山の大歇仲謙の法を嗣ぐ。『増集統伝燈録』巻四に「慧旛象潭泳禅師」の章が存

し、『仏祖正伝宗派図』にも「白雲象潭濡泳」とある。白雲とは祖元ゆかりの明州の白雲庵のことか。濡泳が住持した慧嚴とは蘇州(江蘇省)崑山東南の慧嚴禪院(薦嚴資福禪寺)のことであろう。『仏光国師語録』巻二「往来偈頌」に「寄象潭和尚」の偈頌二首(大正蔵八〇・一四一c—一四二a)と「象潭見寄」の偈頌(大正蔵八〇・一四三b)を収めており、祖元が濡泳と親しい道交をなしていたことが知られる。

石林：松源派の石林行鞏(一一二〇—一二八〇)のこと。婺州(浙江省永康県の葉氏。天童山の滅翁文礼の法を嗣ぐ。安吉州すなわち湖州(浙江省)の上方寺・思溪円覚寺、洪州(江西省)の黄龍山崇恩寺、蘇州の承天能仁寺を経て杭州の浄慈寺に陞住する。至元一七年二月二六日に世寿六一歳(一説に六〇歳とも)で示寂する。成實堂文庫(御茶

の水図書館)に十三世紀後半の元版『石林和尚語録』二巻が所蔵されるが、活字化されておらず一般に知られていない。語録巻末に顔汝勲撰「行実」を収め、別に『勅建浄慈寺志』巻一二にも鄧文原撰「石林禪師鞏公塔銘」が存する。『仏光国師語録』巻二「往来偈頌」に「寄石林和尚」の偈頌(大正蔵八〇・一四二a)と「送履姪見思溪石林和尚」の偈頌(大正蔵八〇・一四三b)を収め、祖元が行鞏と親しい道交をなしていたことが知られる。

道声：仏道の名声、仏道の誉れ。道誉。藹然：盛んなさま。雲の集まるさま。

叢林に洽く：叢林は禪の修行道場。諸方の禪寺。洽は遍し、広く行き渡ること。

### 「白雲庵で老母を養い、台州真如寺へ出世する」

次年、有里人萍郷辛羅公季勉、主白雲、爲編蒲舉也。歷七載、老母喪。復歸靈隱、赴退耕之招、卽歸後板。是年秋、太傅平章賈公似道、欽嚮師劄請、開法台州真如。居七年、學者雲集。

歸—皈 耕—畊 歸—皈 年—歲 章—章 也—歴

次年、里人萍郷の辛羅公季勉有りて、白雲を主らしめ、蒲を編む挙てを爲す。七載を歴て、老母喪す。復た靈隱に帰り、退耕の招きに赴きて、即ち後板に帰す。是の年の秋、太傅平章賈公似道、師を欽嚮して劄にて請し、台州の真如に開法せしむ。居ること七年、學者は雲のごとく集まる。

次年：祖元の三七歳のとき。景定三年（一二六二）のこととされる。

里人：里の人。村人。同郷の人。ここでは明州慶元府の人を指す。

萍郷の宰：袁州（江西省）萍郷県の長官。萍郷県の知事。

羅公季勉：羅季勉。明州慈溪県の人。袁州萍郷県の知県となる。ただし、無学祖元の伝記史料に登場するのみで、字や号など詳しい事跡は何ら伝えられていない。

白雲：明州鄞県東南の東錢湖の浜辺に存した白雲庵のこと、一に羅庵ないし羅庵とも称したものらしい。「仏光国師語録」卷二「往来偈頌」に「白雲菴居咄咄歌」という祖元が詠じた長篇の歌頌（大正藏八〇・一四五b～一四六a）を収めている。「物初贖語」卷一七「跋」に「跋下送三元首座住三蘿菴偈編」という大慧派の物初大観が蘿庵（白雲庵）に住する首座祖元を送る文が載せられている。また「仏光国師語録」卷九「附録」には曹洞宗宏智派の直翁可拳（静慧禪師、一一二一—？）が祖元に寄せた「寄上元住三白雲菴侍母」の偈頌（大正藏八〇・三三七b）を載せている。

蒲を編む拵てを為す：蒲を編むとは蒲鞋を編むこと、草鞋を作ること。唐代に黄檗下の睦州道蹤（道明）が蒲鞋を編んで老母を養った故事に因んで祖元が白雲庵で母陳氏を養ったことをいう。道蹤を陳蒲鞋・陳尊宿と称する。祖元は許氏であるが、母の姓が道蹤と同じ陳氏であるのも興味深い。

七載を歴て：七年間を経過して。祖元は三七歳から四三歳まで母を扶養したことになる。『仏光国師語録』卷二「台州真如禪寺語録（二）」

の「往来偈頌」に「菴中与三老母守一歲」という偈頌三首（大正藏八〇・一四四a～b）を載せる。

老母喪す：母の陳氏が亡くなったこと。母は咸淳四年（一二六八）に逝去したことになる。このとき祖元が四三歳であるから、老母陳氏はすでに七〇歳前後に達していたものと見られる。

靈隱：杭州の靈隱寺。前出。

退耕：破庵派無準下の退耕德寧（？—一二六九）のこと。郷関・俗姓などは定かでない。無準師範の法を嗣ぐ。嘉興府（浙江省）の崇聖寺に出世し、蘇州の報恩寺・承天寺・万寿寺などを経て、杭州の靈隱寺に陞住する。永平道元の『永平元禪師語録』に松源派の虚堂智愚や曹洞宗の無外義遠（？—一二六六）とともに跋文を寄せている。咸淳五年八月に示寂。「仏燈国師語録」卷末の「大日本特賜仏燈国師約翁和尚無相之塔銘并序」によれば、入宋した大覚派の約翁徳儉（仏燈国師、一二四四—一三三〇）が靈隱寺で徳寧の入滅に遭遇している。「仏光国師語録」卷二「台州真如禪寺語録」の「往来偈頌」に「送三僧承天見退耕」の偈頌（大正藏八〇・一四四a）を収め、卷九「偈頌」に「贈三坡雪崖帰省退耕和尚」の偈頌（大正藏八〇・三二一c）を収めている。

後板：僧堂内の聖僧龕の左右を出入板といい、その後ろをいう。後堂首座（後堂）がこれを管理する。

是の年の秋：咸淳五年（一二六九）のこと。秋は七月から九月の間。この年八月には退耕德寧が靈隱寺にて示寂しており、一〇月には虚

一堂智愚が径山にて世寿八五歳で示寂している。

太傅平章：太傅は太帥・太保とともに三公の一つで、天子(皇帝)の補佐役。太帥の次位であるが、ここでは丞相のこと。平章は平章事のこと。唐宋代には宰相を意味する。正しくは同中書門下平章事。『仏光国師語録』卷一「住大宋台州真如禪寺語録」の「指法座云」に「此瓣香、熱向爐中、仰祝太傅平章国公、伏願開闢邦国雄基、康濟太平事業」のことは(大正蔵八〇・二二九c)が存する。

賈公似道：賈似道(字は師憲、秋壑、一一二一—一二七五)のこと。台州(浙江省)の人。姉が理宗の寵妃であったため出世し、軍人・政治家として活躍する。開慶元年(一二五九)に元軍(蒙古軍)の侵入を鄂州(湖北省)で破り、その功により宰相となる。反対派を排除して権力を握るが、徳祐元年(元の至元一二年、一二七五)に元軍に敗れて失脚し、福建の地に流罪となる途中で八月に殺害される。年六三歳。『宋史』卷四七四(列伝第二三三)の「姦臣四」の「賈似道」に伝が存する。

欽嚮：欽尚・欽仰。敬い尊ぶ。敬い慕う。

劉請：劉は申し文、家臣が君主に差し出す上奏文など。

台州の真如：台州(浙江省)臨海県東一〇五里に存した真如禪寺(真

## 〔元兵と臨劍頌〕

乙亥秋、値兵難、退過温之鴈峰。次年、重兵壓境、擧衆逃匿。師獨兀坐堂中、兵以刃加頸。師怡然述頌云、乾坤無地卓孤筇、喜得人空法亦空、珍重大元三尺劍、電光影裏斬春風。復爲說法。衆兵悚聞、悔謝作禮而去。

如禪院)のこと。唐の武徳二年(六一九)に建ち、もと回向院と称する。北宋の大中祥符元年(一〇〇八)に真如院と改められる。『嘉定赤城志』卷二七「寺觀門一」の「臨海(禪院)」に記事が存する。また『嘉定赤城志』卷一四「版籍門二」の「寺院」によれば、臨海県の真如院は田一一四畝、地一四三畝、山五三畝を所有していたことが知られる。『増集統伝燈録』卷一「吉州青原信庵唯禪師」の章によれば、大慧派の信庵唯禪(惟禪とも、?—一一九二)がやはり真如院に開堂出世している。

開法：開堂出世して住持として仏法を示すこと。『仏光国師語録』卷一の侍者一真編「住大宋台州真如禪寺語録」に「師於咸淳五年十月初二日、臨安府靈隱首座寮、被尚書省劉差請、住持真如禪寺」。(中略)此月二十日入院(大正蔵八〇・二二九b)とあるから、祖元は咸淳五年(一二六九)一〇月二日に靈隱寺の首座寮で請を受け、一〇月二〇日に真如寺に入院していることが知られる。

居ること七年：咸淳五年から七年間にわたって台州真如寺に住持したとすると、住持期間は南宋の徳祐元年(元の至元一二年、一二七五)すなわち五〇歳のときまでとなろう。

学者：学人。仏道を学び修行する者。參禪学道の徒。

鷹峰—雁峯 裏—裡

乙亥の秋、兵難に値い、退きて温の鷹峰に過ぐ。次年、重兵、境を圧し、衆を挙げて逃匿す。師、独り堂中に兀坐するに、兵、刃を以て頸に加う。師、怡然として頷を述べて云く、「乾坤、孤節を卓するに地無し。喜び得たり、人空にして法も亦た空なることを。珍重す、大元三尺の劍、電光影裏に春風を斬る」と。復た為めに説法す。衆兵、悚れ聞き、悔謝作礼して去る。

乙亥の秋：南宋の徳祐元年（元の至元一二年、一二七五）の秋。

兵難：元軍（蒙古軍）の乱人による国難をいう。この年の蒙古軍（元軍）は建康府（南京）に入り、さらに鎮江（江蘇省）の焦山で南宋軍を撃破して大勝し、南宋軍が再起不能に陥る。『元史』卷八「至元十二年七月」の条など。

温の鷹峰：温州（浙江省）瑞安府樂清県東九〇里の北雁蕩山のこと。

奇巒奇怪にして羅漢応現の地ともされ、山中には靈峯寺・靈巖寺・能仁寺など一八カ寺を列ねる。このとき祖元が到ったのは西内谷芳嶺下の能仁禪寺であり、北宋初期に僧全了が芙蓉庵を結んだのに始まり、咸平二年（九九九）に承天寺と賜う。南宋初期に能仁普濟禪寺と改められ、楊岐派仏眼下の竹庵士珪（一〇八三—一一四六）が禪刹開山となる。山志として『雁山志』四巻が存する。このとき祖元は能仁寺の住持であった松源派の横川如珙（此庵、一二二二—一二八九）を頼つて避地している。『仏光国師語録』卷二「往來偈頌」に「送横川主鷹山靈巖」の偈頌（大正蔵八〇・四二a）が存し、『横川和尚語録』卷上「雁蕩山靈巖禪寺語録」「鷹山能仁禪寺語録」

によれば、如珙は咸淳四年（一二六八）九月二八日に靈巖寺に入寺し、咸淳八年（一二七二）一〇月二四日に能仁禪寺に入寺しているから、祖元は如珙が能仁寺に住して四年目にそのもとに身を寄せたことになろう。

次年：南宋の景炎元年（徳祐二年）すなわち元の至元一三年（一二七六）のこと。祖元五一歳に当たる。

重兵：重要な軍隊。主要部隊。ここでは大元（蒙古）の主力部隊。境を圧し：圧境は国境に迫ること。圧は迫る、制圧すること。

逃匿：逃げて隠れること。逃竄。隠匿。

堂中：堂宇の中。ここでは僧堂内の単位。

兀坐：動かずにじつと坐ること。正しく端坐すること。坐禅すること。

正身端坐。『蘇東坡詩集』卷三の「客位假寐」の詩に「謁入不<sub>レ</sub>得去、兀坐如<sub>二</sub>枯株<sub>一</sub>。豈惟主忘<sub>レ</sub>客、今我亦忘<sub>レ</sub>吾」とある。

刃を以て頸に加う：刀劍の刃を首に当てる。頸は首、とくに首の前の部分。

怡然：喜び楽しむさま。心が和らぎ楽しむさま。素直なさま。

頌を述べて…この頌は一般に「臨劍頌」と称されているが、祖元の伝

記史料に載るのみで、『仏光国師語録』の本文には収められていない。

大慧派の中巖円月(中正子、仏種慧濟禪師、一三〇〇—一三七五)の『東

海一漚集』四の「藤陰瑣細集」(『五山文学新集』第四卷、四六一頁)

によれば、かつて一山派の雪村友梅(幻空、宝覺真空禪師、一二九〇

—一三四六)が在元中に元の官軍に捕われた際、祖元の「臨劍頌」

を唱えて難なきを得たことが記されている。

乾坤：天地。天と地。陽と陰。乾は天の剛健なはたらきを象徴し、坤

は生命を成長させる大地のはたらきを象徴する。

孤筇：一つの杖。竹の杖。筇は筇とも。四川に産する竹の一種で、杖

にするのに適する。

人空：二空の一。人の肉体は五蘊が仮和合したものであって、因縁所

生の存在であれば、常一なる私の実体はないとする。人無我。我見

によつて執着するような人は存在しないということ。

法も亦た空なる：法空・法無我のこと。万有はみな仮の存在で実体が

ない、一切は縁起によつて起こるもので実体がないとする。

珍重：珍しいものとして大切に。別れを告げる辞。お体をお大事に。

### 「天童山の第一座と日本からの要請」

次年還天童、環溪請歸第一座。次年五月、日本平將軍、以建長虚席、航海遠招。遂從所請。環溪一和尚、以無準衣授師。師拈起云、世尊傳金襴外、別傳何物。咄。過在汝、殃及我。披衣陞座、一香始爲無準拈。說法別衆、顧視大眾云、古人逾海越漠而至中華、有大法可傳。今日、元上座、赴日本平將軍之招。且道、有甚巴鼻。豈不見道、羽嘉生應龍、應龍生鳳凰、鳳凰生衆羽。諸人、但看雲

体を大切にしなさい。

大元：偉大なる元朝。元の国を称えた表現。大は偉大な、尊称や美称

として用いる接頭語。

三尺の劍：三尺は劍の長さ。宋元代には一尺は三〇・七二センチ。『漢書』

卷一下「高帝紀第一下」に「吾以三布衣、提三尺取天下」、此非二

天命乎。命乃在<sub>レ</sub>天、雖<sub>二</sub>扁鵲<sub>一</sub>何益」とある。

電光影裏：電光は稲妻・稲光。影裏は光のこと。『虚堂和尚語録』卷

一〇「真贊」の「淨覃藏王請」ら「淨覃知藏善知<sub>レ</sub>機、電光影裏分<sub>二</sub>

寶主<sub>一</sub>」(大正藏四七・一〇六一b)とある。

春風を斬る：春風を切り裂く。春風は春の風、春の和やかな風。万物

を生育するものの譬え。

衆兵：多くの兵士。ここでは元軍(蒙古軍)の兵隊たち。

悚れ聞き：恐れ入つて聞く。悚は恐れて身が疎む、ぞつとすること。

悔謝：過ちを悔いて謝ること。懺悔すること。

作礼して去る：礼拝すること。インド風の礼をなすこと。作は行なう・

なす。諸經典の末尾には「作礼而去」と記されることが多い。



・駛月運、莫説舟行岸移。若也、會得、朝朝相見。其或未然、遠引孤帆、不勝依戀。

歸—飯座—坐—招—拈—映—殃—岸—岩—若也—若也若也

次年、天童に還るに、環溪、請して第一座に帰す。次年五月、日本の平將軍、建長の席を虚くるを以て、海に航して遠く招く。遂に請する所に従う。環溪一和尚、無準の衣を以て師に授く。師、拈起して云く、「世尊、金襴を伝うる外、別に何物をか伝う。咄。過は汝に在り、殃い我れに及ぶ」と。衣を披て陞座し、一香、始めて無準の爲めに拈す。説法して衆に別れ、大衆を顧視して云く、「古人は海を逾え漠を越えて中華に至り、大法の伝う可き有り。今日、元上座、日本の平將軍の招きに赴く。且らく道え、甚の巴鼻か有る。豈に道うことを見ずや、『羽嘉は応龍を生じ、応龍は鳳凰を生じ、鳳凰は衆羽を生ず』と。諸人、但だ看よ、雲駛せ月運ぶことを。説くこと莫かれ、舟行き岸移ると。若也し會得せば、朝朝に相見せん。其れ或いは未だ然らずば、遠く孤帆を引いて、依戀するに勝えず」と。

次年：元の至元一五年（南宋の祥興元年、一二七八）に当たる。

天童：明州鄞県東六〇里の天童山景德禪寺のこと。唐末に洞山下の天

童咸啓が禪刹開山となる。北宋代までは小利であったが、南宋初期に曹洞宗の宏智正覚が第一六世中興として住持し、一二〇〇人の修行僧を擁する大刹となり、さらに黄龍派の慈航了朴や虚庵懷敏らが住持して伽藍を整える。明庵栄西が黄龍派の虚庵懷敏に参じ、永平道元が曹洞宗の長翁如浄に参ずるなど、多くの日本僧が掛搭したことで知られ、また蘭溪道隆や無学祖元が来日する直前にそれぞれ天童山に身を寄せていたことも重要であろう。南宋五山の第三位に列する。明代の『天童寺志』五卷や清代の『新纂天童寺志』一〇巻などが存する。

環溪：破庵派無準下の環溪惟一（一二〇二—一二八二）のこと。資州

（四川省）墨池の賈氏。無準師範の法を嗣ぐ。淳祐六年（一二四六）に建寧（福建省）の瑞巖寺に出世し、その後、主に江西の諸刹に歴住し、袁州（江西省）の仰山太平興國禪寺から福州（福建省）の雪峰山崇聖禪寺を経て明州の天童山景德禪寺に陞住する。至元一六年（一二七九）冬に住持を退き、至元一八年九月に世寿八〇歳で示寂。「環溪和尚語録」二巻が存し、巻末に「行状」を収める。法嗣の鏡堂覚円（大円禪師、一二四四—一三〇六）が無学祖元に随侍してともに来日している。『仏光国師語録』卷八「偈頌」に「環溪和尚寿塔落成、因拉同遊」席上偶成四句見意」という偈頌（大正蔵八〇・二二二b）を収めている。

第一座：首座。大衆（修行僧）の上首。僧堂の前版第一位。『仏光国師

語録」卷二「仏光円満常照国師台州真如禪寺語録」に祖元が天童山の首座としてなした「天童首座乗弘(除夜乗弘)」「結夏乗弘」「冬至乗弘」という三度の乗弘法語(大正蔵八〇・一四〇c、一四一b)を収めている。

次年五月：元の至元一六年(日本の弘安二年、一二七九)五月。

日本の平将軍：鎌倉幕府第八代執権の北条時宗(法光寺殿道泉、一二五一―一二八四)のこと。北条氏は桓武平氏、平直方を祖とする。時宗の父は北条時頼。母は北条重時の娘。文永元年(一二六四)に連署、同五年に執権となる。蒙古の使者がしばしば訪れたため、西国の守りを固める。文永二年(一二七四)と弘安四年(一二八二)の二度にわたる元寇(蒙古襲来)を西国武士を動員して防ぐ。禅宗を信じ、元国より無学祖元を招いて円覚寺の開山に拝請する。弘安七年四月四日に三四歳で没する。墓所は円覚寺仏日庵。川添昭二「北条時宗(吉川弘文館「人物叢書」二二〇)などに詳しい。

建長の席を虚くる：弘安元年(元の至元一五年、一二七八)七月二四日に松源派(大覚派祖)の蘭溪道隆(大覚禪師、一二三二―一二七八)が世寿六六歳で示寂している。道隆は建長寺開山であり、三たび建長寺の住持となっている。巨福山建長興国禅寺は鎌倉山之内に存し、第五代執権の北条時頼(最明寺殿道崇、一二二七―一二六三)が建立して蘭溪道隆を開山に拝請し、後に鎌倉五山の第一位となる。

海に航して遠く招く：円覚寺には弘安元年一月二三日に北条時宗が撰した紙本墨書の書状一幅が所蔵され、重要文化財に指定されている。

る。「仏光国師語録」卷三「住日本国相州巨福山建長興国禅寺語録」の冒頭に「日本国副元帥平時宗請帖」(大正蔵八〇・一四六b)として載せられている。時宗が詮蔵主と英典座すなわち蘭溪道隆の門下であった無及徳詮と傑翁宗英を宋朝(実際にはすでに元朝)に派遣し、禅門の俊傑を日本に請来せんとしていることが知られる。

環溪一和尚：環溪惟一のこと。「仏光国師語録」卷三「住日本国相州巨福山建長興国禅寺語録」には「師在大宋国天童山景德禅寺受請辞」衆上堂を収めており、冒頭に「天童環谿和尚、付衣罷。師拈起云、世尊伝二金襴一外、別伝二箇甚麼」(大正蔵八〇・一四六b)と記されている。無準の衣：無準師範から環溪惟一に相承された袈裟ないし法衣。伝衣の品。このとき惟一から祖元に授与された師範の伝衣とされるものがいまま布帛製「海松色宝尺文綾九条袈裟」一肩として円覚寺に所蔵されており、縦一四四・五センチ、横三二七・〇センチとなっている。五島美術館編「鎌倉円覚寺の名宝」の三六頁―三七頁に「傳衣記」とともに掲載される。

拈起：指先で摘み上げる。手に取り上げる。

世尊、金襴を伝うる外、別に何物をか伝う：世尊は仏陀・釈尊。金襴は金襴袈裟のこと。『無門関』第二二則に「迦葉因阿難問云、世尊伝二金襴袈裟一外、別伝二何物。葉喚云、阿難。難応諾。葉云、倒却門前刹竿」著(大正蔵四八・二九五c)とある摩訶迦葉と阿難陀の「迦葉刹竿」の問答古則を踏まえる。ここでは世尊は無準師範に、摩訶迦葉は環溪惟一、阿難陀は無学祖元にそれぞれ準えられている。

咄：叱咤する叫び。叱ったり、呼び掛けたりする声。

過は汝に在り、殃い我れに及ぶ：日本からの書状があなた（惟一）のもとに届いたのに、私（祖元）が行くことになった。『仏光國師語録』

卷三「住日本国相州巨福山建長興国禅寺語録」の「師在二大宋国天童山景德禅寺受レ請辞レ衆上堂」では「師兄過在レ徧、殃及レ我」（大正藏八〇・一四六b）に作る。

衣を披て：披衣は袈裟を羽織ること。搭袈裟。ここでは環溪惟一から付与された無準師範の袈裟を祖元が身に纏い掛けたこと。

陞座：請によって法堂の須弥座上つて説法すること。上堂すること。『仏光國師語録』卷三「仏光円満常照国師住日本国相州巨福山建長興国禅寺語録」によれば「師在二大宋国天童山景德禅寺受レ請辞レ衆上堂」を取めており、冒頭に「天童環谿和尚付レ衣罷。師拈起云、世尊伝金襴外、別伝二箇甚麼。以レ手指云、師兄過在レ徧、殃及レ我。遂就レ座」という語（大正藏八〇・一四六b）が存している。

一香：一度、香を焚くこと。ここでは嗣承香を焚くこと、本師のために拈香すること。このとき祖元は無準師範に嗣承香を焚いて師恩に酬いていることになろう。

説法して衆に別れ：上堂説法して天童山の修行僧たちに別れを告げたこと。先の「師在二大宋国天童山景德禅寺受レ請辞レ衆上堂」に「師乃云、祖師逾レ海越レ漠而至二中華、有二大法可レ伝。今日日本平將軍、遠招二山僧。山僧不知レ有二甚巴鼻。良久願二視大衆云、所以道、羽嘉生二応龍、応龍生二鳳凰、鳳凰生二衆羽。但看雲駛月運、莫レ説

舟行岸移。諸人若也會得、朝朝相見。其或未レ然、遠引二孤帆、不レ

勝「依恋」とあることは（大正藏八〇・一四六c）がこれに当たる。大衆：寺内の僧衆。ここでは天童山景德寺の修行僧たち。

顧視：振り向いて見回すこと。振り返り見ることに。

古人は海を逾え漠を越えて中華に至り：古人は禅宗初祖の菩提達磨のこと。達磨が大海を越え砂漠を越えて中国（震旦）にやつて来て佛法を伝えたこと。

大法：仏法のこと。仏陀の正法。仏祖正伝の教え。

元上座：祖元の自称。上座には種々の意味が存するが、ここでは禅宗叢林において僧衆の第一座にある者をいう。

巴鼻：鼻づら、手がかり、根拠、捕らえどころ。

羽嘉は応龍を生じ、応龍は鳳凰を生じ、鳳凰は衆羽を生ず：羽嘉は動物の名、飛蟲（飛鳥）の先。応龍は龍の一種で、翼があるもの。鳳凰は聖主が世に現われるときに出現するとされる神鳥、雄を鳳とい

い、雌を凰という。衆羽は多くの鳥、庶鳥に同じ。『淮南子』（『淮南鴻烈解』とも）卷四「墜形訓」に「羽嘉生二飛龍、飛龍生二鳳凰、鳳凰生二鸞鳥、鸞鳥生二庶鳥。凡羽者生二於庶鳥。毛犢生二応龍、応龍生二建馬、建馬生二麒麟、麒麟生二庶獸。凡毛者生二於庶獸」とあり、

庶鳥の羽と庶獸の毛についての記事が存している。

雲駛せ月運ぶ：雲が馳せ、月が動く。天地や大自然の運行をいう。『池州南泉普願禅師語要』「示衆」に「暫時岐路、雲駛月運、舟行岸移。

衆生妄想、物無レ不住。豈况理能遷変」（中統藏一・一八・一四八b）

とある。

舟行き岸移る…舟が動いて岸边が移つていく。舟行は舟に乗つて行くこと。舟が動くとき岸边が動くような錯覚になる。

会得…よく分かる、よく理解する。理解してすっかり自らのものにする。

朝朝…毎朝。朝毎に。毎朝目が覚めると。

相見…相い会う。拝顔する。師と弟子が相い見える。

遠く孤帆を引いて、依恋するに勝えず…遙か遠くに一艘の舟を眺めて、恋慕するしかない。遠く慕うだけで相見することができない。孤帆は一艘の帆掛け舟。依恋は頼り慕う。

「日本に到つて建長寺に開堂し、円覚寺を兼住する」

以五月廿六日、離太白。六月初二日登舟、當月抵日本。八月廿一日、至建長開堂演法。前相州平公、執弟子之禮、仰高道化、特建圓覺之妙場、請開山而兼住。此日、羣鹿臨筵、師以瑞鹿山爲名、學者臻萃。實弘安五年壬午十二月八日也。

廿六—二十六 廿一—二十一 開—開 羣—群 萃—華

五月廿六日を以て、太白を離る。六月初二日、舟に登り、当月に日本に抵る。八月廿一日、建長に至りて開堂演法す。前相州平公、弟子の礼を執り、道化を仰高し、特に円覚の妙場を建て、開山に請して兼ねて住せしむ。此の日、羣鹿、筵に臨み、師、瑞鹿山を以て名と爲し、學者、臻り萃まる。実に弘安五年壬午十二月八日なり。

五月廿六日…元の至元一六年(日本の弘安二年、一二七九)五月二十六日。

この日に天童山を出発したことが判明する。

太白…太白峰または太白山。天童山景德禪寺のこと。天童山の名の由来は、太白星(金星)から天童が舞い降りたという伝説に因む。

六月初二日、舟に登り…六月二日に明州港より日本に向う船に搭乗した

たこと。

当月…その月の内、すなわち六月中のこと。『元亨釈書』の祖元章でも、

やはり六月中に筑前(福岡県)大宰府に到つたとされる。

日本に抵る…日本に辿り着く。ここでは筑前の博多津に着岸したか、大宰府に到着したのをいう。

八月廿一日…太宰府に着いてから二ヶ月前後を経ており、八月二日に鎌倉建長寺に入寺している。

建長…巨福山建長寺のこと。開山始祖の蘭溪道隆より第二世の兀庵普寧(宗覚禅师、一一九七?—一二七六)と第三世の大休正念(仏源禅师、

一二二五—一二八九」と第四世の義翁紹仁（普覚禪師、一二二七—一二八一）を経て、無学祖元は第五世として建長寺に住持している。開堂演法：新命の住職が初めて寺院に着任し、最初に仏法を開演する儀式。『仏光国師語録』卷三「仏光円満常照国師住日本国相州巨福山建長興国禅寺語録」によれば、祖元は弘安二年（一二七九）八月二一日に建長寺に入院開堂している。

前相州平公：前の相模守であった北条時宗のこと。建長寺語録では「相州太守都総管」（大正蔵八〇・二四七b）とある。

弟子の礼：弟子としての威儀作法。ここでは北条時宗が俗弟子としての立場で無学祖元を本師と仰いで接したこと。『仏光国師語録』卷四「小仏事」に「檀那法光寺殿落髮」「付衣」と「至道大師落髮」「付衣」という四度の小仏事（大正蔵八〇・一七四c）を収める。法光寺殿は北条時宗であり、至道大師とは安達義景の娘で時宗の妻となり、後に仏門に帰した覚山至道尼（潮音院殿、一二五二—一三〇六）のことを指す。至道尼は鎌倉山之内の松岡山東慶寺（駄込寺・縁切寺）の開山として名高い。

道化：仏道の教化。教え導くこと。  
仰高：仰ぎ貴ぶこと。崇敬すること。

円覚：鎌倉山之内の円覚寺すなわち瑞鹿山円覚興聖禅寺のこと。弘安五年に北条時宗の創建になり、無学祖元を開山とする。鎌倉五山の

第二位。玉村竹二・井上禅定編『円覚寺史』（一九六四年、春秋社刊）や五島美術館編『鎌倉円覚寺の名宝』（二〇〇六年刊）などが存する。妙場：妙処・妙所に同じ。すぐれたところ。究極の場所。円覚の妙場とは円満にして欠けたることのない悟りの妙なる場所。

開山：寺院を開創した僧。または初代に拝請された僧。  
兼ねて住せしむ：建長寺と円覚寺の住持職を兼務したこと。

此の日：円覚寺開堂の日。

羣鹿、筵に臨み：白鹿が群をなして随喜し、祖元の説法を聞いたという伝承。筵は竹製のむしろ、また座席の意。ただし、すでに静照が本史料ですでに触れているから、実際に鹿が戯れる鹿野苑であったことになろう。

瑞鹿山：円覚寺の山号。単に鹿山とも略称される。奇瑞の鹿が戯れる山の意。古代インドの鹿野苑を意識した発想か。

学者、疎り萃まる：学仏道の修行僧が参集したこと。学者は学人、仏道を学ぶ者。

弘安五年壬午十二月八日：日本の弘安五年（一二八二）十二月八日の成道会に当たる。『仏光国師語録』卷四「相州瑞鹿山円覚興聖禅寺開山語録」にも「弘安五年十二月八日開堂」（大正蔵八〇・二六七c）と記されている。

「北条時宗が逝去し、円覚寺を退住する」

甲申四月四日、平公俄逝。師嘆曰、吾宗外護云亡、興正法者誰乎。未幾、伐鼓遽退圓覺。檀越屢命、固辭不從、緇白逾散。至秋因疾、自作悼頌七首、已傳叢林。明年夏、日勤夜肅、唱道不倦。一衆欣從、時無虛弃。法社之盛、未有此也。其夏將滿、函丈簷除桂橘二樹、翠葉忽謝。師見之曰、吾不久矣。

甲申四月四日、平公、俄かに逝く。師、嘆じて曰く、「吾が宗の外護、云に亡せず、正法を興す者は誰ぞや」と。未だ幾ならざるに、鼓を伐ちて遽かに円覚を退く。檀越屢しは命ずれども、固く辞して従わず、緇白逾いよ散ず。秋に至りて疾に因り、自ら悼頌七首を作り、已に叢林に伝う。明年の夏、日に勤め夜に肅み、唱道して倦まず。一衆、欣從して、時に虚しく弃つる無し。法社の盛んなること、未だ此れ有らざるなり。其の夏、將に満たんとするに、函丈簷除の桂・橘の二樹、翠葉忽ち謝る。師、之れを見て曰く、「吾れ久しからず」と。

甲申四月四日：弘安七年（一二八四）四月四日に当たる。この日に北

条時宗（法光寺殿）が逝去する。

平公、俄かに逝く…平公は北条時宗（法光寺殿）のこと。北条時宗の死去については、川添昭二「北条時宗」（吉川弘文館・人物叢書二三〇）の「終焉」の項を参照。『仏光国師語録』巻四「小仏事」に「法光寺殿下火」（大正蔵八〇・一七五a）を収め、同巻八「偈頌」にも「悼法光寺殿」（六六）という哀悼の偈頌六首（同・二二五b）を収めている。

吾が宗…我が宗門。禪宗とくにここでは臨濟宗のことを指す。

外護…外部から保護を加える。外部より権力や財力をもって仏教を保護すること。外護者。仏教信者や檀越をいう。

正法を興す者…正しい仏の教えを興隆させる者。正法は正像末の三時の意もあるが、ここでは仏祖正伝の禪宗の教え。

鼓を伐ちて…太鼓を打ち鳴らす。伐は打つ、叩く。鼓を打つこと。円覚を退く…円覚寺の住持職を退くこと。『仏光国師語録』巻四「相州瑞鹿山円覚興聖禪寺語録」には「退院上堂」を収め、冒頭に「前年膺月住此山、今年膺月離此山」（大正蔵八〇・一七二c）とあるから、祖元が円覚寺を退いたのは弘安七年二月（臘月）のことである。他の伝記史料では建長寺山内に退閑している。

檀越…梵檀越。ダーナバテイ、陀那鉢底・陀那婆のこと。施主。布施をする人。恵みを与える人。檀那は施・布施のこと。

緇白…黒と白。緇素とも。僧侶と俗人。僧侶の衣服は黒衣であり、白

衣は俗人の着物を意味する。

秋に至りて：弘安七年の秋とも取れるが、先の流れからすると弘安八年（一二八五）の秋でなければならぬ。陰暦の秋は七月から九月。

疾：病い。とくに急性や悪性の病氣。

悼頌七首：『仏光国師語録』巻八「偈頌」に「自悼（七）」として自らの最期を悼む偈頌七首（大正蔵八〇・二一五b-c）を収めており、

祖元がこの七首を詠じたのが弘安七年の秋であったことが知られる。

叢林：樹木が生い茂る林。僧衆が和合して一処に住するさま。禪宗の

修行道場。双林とも。

明年の夏：弘安八年（一二八五）の夏のごとくに解されるが、実際には弘安九年（一二八六）の夏とすべきであろう。陰暦の夏は四月から六月に当たる。

日に勤め夜に肅しみ：日勤は毎日仕事に出ること、日々の勤めを行なうこと。夜肅は夜に身を慎んで行儀を質すること。

唱道：道を唱える。唱え導く。法門を演説する。宗旨を唱える。宣揚する。

八月廿六日、師謂余曰、吾有一事、辨在九月。余曰、是何事耶。師曰、幻盡道資。廿八日、爲衆入室罷、示有微恙。咲曰、逝山時至也。

九月初一日、師兩班會茶、亦赴參請如常。初二日、師敘出世始末之意、語皆愴然。當夜於丈室中、或行或坐、以手敲床、吟詠至曉。人不知何意。初三日、齋前書報謝之偈。先曉諸人云、一切行無常、生者皆有苦、五陰空無相、無有我我所。師懇激勵衆以爲常、略不相做。齋後語徒弟云、吾臨此土、受苦八年矣。且喜今夜快怡去也。小師慧曇、畫師頂相請贊。即爲染筆贊畢。自寫遺書、別檀那之外護、叮嚀祖宗切矣。又親札貽於諸方、付囑殆盡。

欣從：喜んで従う。欣服。隨喜と同じ。

法社：仏道修行のために結んだ法会またはグループ。仏法の結社。社は同志的結合体。

其の夏、將に満たんとする：弘安八年の夏がまさに終わろうとしている時期。六月の末のこと。あるいは夏安居の終わる七月一日（解夏）のことか。

函丈：函丈。方丈・丈室のこと。住職の居室。

簷除：簷は建物の軒・ひさし。除は建物の階段・きざし。

桂・橘の二樹：桂は肉桂、くすのき科の常緑高木。また常緑の香木の総称。橘はくねんぼ、まつかぜそう科の常緑低木。みかん類の総称。

翠葉忽ち謝る：翠葉は緑色の葉、萌黄色の葉。謝は散ること、凋み衰えること。

吾れ久しからず：自分がこの世に在ることが久しくないのを自覚した

ことば。

廿六—二十六 辨—弁 廿八—二十八 略—畧 慧—惠

八月廿六日、師、余に謂いて曰く、「吾れに一事有り、辨ずること九月に在らん」と。余曰く、「是れ何事をや」と。師曰く、「幻のごとく道資を尽くせり」と。廿八日、衆の爲めに入室し罷りて、微恙有ることを示す。咲いて曰く、「逝山、時至れり」と。九月初一日、師、両班の会茶にも、亦た参請に赴くこと常の如し。初二日、師、出世始末の意を叙べ、語は皆な愴然たり。当夜、丈室の中に於いて、或いは行じ、或いは坐し、手を以て床を敲き、吟詠して曉に至る。人、何の意なるかを知らず。初三日、齋前に報謝の偈を書す。先に諸人に曉して云く、「一切行は無常にして、生ずる者は皆な苦有り、五陰は空にして無相なり、我我所有ること無し」と。師、懇に衆を激励すること以て常と為せば、略して相い做さず。齋後に徒弟に語りて云く、「吾れ此の土に臨んで、苦を受くること八年なり。且喜すらくは、今夜、快怡し去らん」と。小師慧曇、師の頂相を画きて賛を請う。即ち爲めに染筆して賛し畢わる。自ら遺書を写し、檀那の外護に別れ、祖宗に叮嚀なること切なり。又た親札をば諸方に貽り、付囑すること殆んど尽くす。

八月廿六日…文の流れからすると弘安八年八月二十六日のように解されるが、すでに触れたごとく祖元が示叙する弘安九年(元の至元二三年、一二八六)の八月二六日でなければならぬ。

余…本史料「仏光禪師行状」を撰述した無象静照の自称。

一事…一つの務め、一つの任務。一つの事柄。わずか一つのこと。

辨ずること九月に在らん…九月に明らかとなる。辨は明らかにすること。明白にすること。

幻のごとく道資を尽くせり…幻のごとく仏道の資源を費やした意か。

自らの寿命が尽きたことを述べたものであろう。

入室…修行僧が自己の見解を点検してもらうために師の室に入つて親しく教えや導きを受けること。

微恙…少しの病い、軽い病い。微痾。

咲いて…笑つて。咲は笑の本字。喜んで笑うこと。日本では咲を花が開く意に用いる。

逝山、時至れり…逝山は山を去ること。この山すなわち建長寺を出て逝くことか。逝去する時が至つたことを意味しよう。

九月初一日…弘安九年九月一日のこと。

両班の会茶…両班は東序(東班)の頭首位と西序(西班)の知事位。

会茶は大勢で一所に集まってお茶を飲むこと。

参請…師に参じて質問し、その教えを請うこと。

出世始末…出世は世俗の世界から脱出すること、仏法の世界に入ったことを意味する。始末は始めと終わり、始めから終わりまで、一部



始終。出世の始末で、仏門に投じてからの足跡・行履。

愴然…悲しみ痛むさま。魂を失ったように切なく悲しむさま。

当夜…その夜。そのことがあった夜。

丈室…方丈。禅寺の住持の居室・寢室のこと。

手を以て床を敲き…手で禅床を叩いて。床は禅床。

吟詠…声を挙げて詩歌を詠う。吟詠・吟頌。

初三日…弘安九年九月三日。この日に祖元が示寂している。

齋前…午齋の前。禅林における中食(昼食)の前。

報謝の偈…報恩感謝の偈頌。仏や本師の法恩に感謝してこれに酬いる

ために詠じる偈頌。

諸人…禅寺において住持や師家が多くの修行僧に呼び掛けることば。

諸君・君たち。

一切行は無常にして、生ずる者は皆な苦有り…一切行とは万物すべて、  
因縁によって構成されたあらゆるものをいう。無常はすべてのもの  
が移り変わって少しも止まらないこと。万物が少しも止まることな  
く生滅変化していること。生ある者はみな苦に満ちている。一切皆苦・  
一切行苦のこと。『賢愚経』梵天請法六事品第一の偈に「一切行無常、  
生者皆有<sup>レ</sup>苦、五陰空無相、無<sup>レ</sup>有<sup>二</sup>我我所<sup>一</sup>」(大正藏四・三四九b)  
とある。

五陰…五蘊。五つの集まり。色受想行識の五種の根本。陰は覆うの意。  
空にして無相…空・無相・無作の三解脱門を意味する。すべての存在  
が空であり、差別相を離れており、欲求の思いを捨てること。

我所…自分と自分のもの。我は自分自身、我所は自分の所有と見な  
されるもの。

激励…励ますこと。努め励むこと。激勵。

齋後…齋罷。午齋(中食)の済んだ後。禅寺では朝は粥、昼は飯を食べる。

徒弟…門徒・弟子。門下の者。

此の土…この我々の世界。ここではとくに日本のこと。

苦を受くること八年なり…受苦は苦しみを受けること。祖元が日本で

化導した期間は八年間に限られる。

且喜…見事なである。喜ばしいことにくだ。逆に相手を抑下する意

を含む。

快怡…喜び楽しむ。快も怡も喜ぶこと、楽しむこと。

小師…弟子のこと。弟子僧。とくに得度を受けた弟子をいう。

慧曇…無学祖元の門人。祖元は門下に「慧」を系字として与えている  
から、慧曇も祖元の剃度の弟子であろう。『仏光国師語録』卷八「自  
讚」に「小師慧曇請<sup>レ</sup>讚」の自賛(大正藏八〇・二一九c)と「小師  
慧曇請<sup>レ</sup>讚(臨終時)」の自賛(大正藏八〇・二二〇c)を収め、同卷  
八「偈頌」には「送<sup>三</sup>慧曇之<sup>二</sup>鎮西<sup>一</sup>」の偈頌(大正藏八〇・二二五c)  
を収めているから、晩年の祖元に親しく随侍していた人であろう。

師の頂相…無学祖元の肖像画。頂相は祖師の半身または全身を画いた  
真影。曲泉などに坐した姿で画かれることが多い。これに自ら賛を  
付するのが自賛、他の人が賛を付するのが祖賛(仏祖賛)である。

贊…頂相の上部に書き入れる賛語。ここでは小師慧曇が持ち込んだ祖

元の頂相に祖元自身が自贊のことは揮毫したこと。『仏光国師語録』卷八「自讚」に、

小師慧曇請讚（臨終時）。

這老漢無眼目、能栽石上蓮花、兼擲樹頭蘿蔔。觀之有餘、  
觀之不<sub>レ</sub>足。慧曇若咬得破、六六元來三十六。

として載る自讚がこれに当たり、明確に「臨終時」と付記されている。現在、鎌倉円覚寺に所蔵されている重要文化財の紙本著色墨書「無学祖元頂相」一幅は弘安七年（二二八四）九月三日に祖元が得月楼にて自贊を付したものであり、『仏光国師語録』卷八「自讚」に「曇華上人請讚（真蹟見存円覚）」（大正蔵八〇・二二〇b）として収録されている。

染筆…筆を染める。書画などを書くこと。

### 〔遺偈と示寂および後事〕

宴息の間、師忽云、壁外何聲也。余曰、衆保慧命誦經之聲。師曰、吾住世緣盡、今夜撒手便行決矣。但勉各以宏道、是吾意也。凡諸方問安應接不厭。酉時再示衆云、諸佛凡夫同是幻、若求實相眼中埃、老僧舍利包天地、莫向空山撥冷灰。時遷亥初、更衣端坐、索筆書偈云、來亦不前、去亦不後、百億毛頭師子現、百億毛頭師子吼。置筆泊然而逝。年六十有一、臘四十有九。龕留三日、慈容如生。于時四衆雲集、盡送修茶毘之禮。一會哀慕、無異金棺隱雙樹之間也。遺弟同收靈骨、塔于寺之後麓。實是十月日也。

慧—惠 不後—不前

宴息の間、師、忽ち云く、「壁外は何の声ぞ」と。余曰く、「衆が慧命を保つ誦經の声なり」と。師曰く、「吾れ住世の緣尽く、今夜、手を撒して便ち行かんこと決せり。但だ勉むるに各おの宏道を以てせよ、是れ吾が意なり」と。凡そ諸方の問安應接、厭わず。西

遺書…禅寺の住職や東堂（隠居）などが遷化に先立って、予め後住を選定するなど後事すなわち死後のことを託する文書。

檀那の外護…檀那は布施者・施主・檀越のこと。外護は外部から権力・財力で保護を加えること。

祖宗…祖師によって伝えられて来た宗旨。祖師の説き示した宗旨。禅宗のこと。

叮嚀…丁寧。懇ろに頼む意。念を入れる。

親札…親しく自ら記した書簡。親しく書いた書札・手紙のこと。

諸方…諸地方、諸国。あちこちの。とくに各地の禅寺のこと。

付嘱…他人に告げ依頼すること。依託すること。教えを授け、頼み託すること。

の時に再び衆に示して云く、「諸仏と凡夫は同じく是れ幻、若し実相を求めば眼中の埃。老僧が舍利は天地を包む、空山に向かつて冷灰を撥うこと莫かれ」と。時、亥の初めに遷り、衣を更めて端坐し、筆を索めて偈を書して云く、「来たるも亦た前ならず、去るも亦た後ならず、百億毛頭に師子現じ、百億毛頭に師子吼す」と。筆を置きて泊然として逝く。年六十有一、臘四十有九。龕留すること三日、慈容は生けるが如し。時に四衆は雲のごとく集まり、尽く茶毘の礼を送修す。一会哀慕すること、金棺の双樹の間に隠るるに異なること無し。遺弟、同じく靈骨を取め、寺の後麓に塔す。實に是れ十月日なり。

冥息の間：くつろいで休んでいる間。冥息は安息に同じ、くつろいで休むこと。

壁外は何の聲ぞ：壁の外から聞こえる声は何か。壁は部屋の四面の土

塗りの隔て。これは『碧巖録』第四六則に「鏡清雨滴声」の古則に「鏡清問僧、門外は何聲。僧云、雨滴声。清云、衆生顛倒、迷己逐物」

(大正藏四八・一八二b)とあるのを受けた発想と見られる。

慧命：恵命とも。法身の智慧を生命に譬えた語。法身は智慧をもつて命とする。ただし、ここでは無学祖元の寿命を指す。

誦經：經文を誦読する。声を挙げて經文を読むこと。經文を唱えること。読經・誦經とも。

住世の縁：世間に留まる条件。この世に生きている因縁。

手を撒して：何かに掴まっていた手を一気に放すこと。撒は放す、抛つ。

宏道：広い道、大きい道、広大な道。大いなる仏道のこと。  
問安応接：問安は安否を問うことか。応接は来た人に会うこと、受け答えること。

酉時：酉は十二支の第一〇番目。時刻では午後六時の前後。

諸仏と凡夫：諸仏は諸々の仏。三世十方の仏。凡夫ははまだ仏道に入っていない人々。平凡な人間、迷える者。

幻：事物の実体がないことに譬える。

実相：真実ありのままの姿。ここでは真実だという思い。

眼中の埃：目の中の塵。目の中にある埃。邪魔なもの。

老僧：禅僧の自称。わたし。

舍利：梵 *śāraṇa* シャーリラの音写。設利羅。仏陀や聖者の遺骨。碎身舍利。

身骨・靈骨。

空山：人氣のないひっそりした山。ここでは遺体を火葬した山。

冷灰：火の気のない冷たい灰。火の消えた灰。死灰。

亥の初め：十二支の第二番目。時刻では午後二時の前後。亥の初

めとあるから、午後一時から真夜中にかけての頃。

衣を更めて端坐し：更衣は衣を着替えること。端坐は正しく作法に則つて坐ること、坐禅の姿をとること。

偈：梵 *gāthā* 偈頌のこと。韻文の体裁をとる禅宗の詩文。ここでは末期

に臨んで詠じる遺偈。祖元の遺偈は四言二句に七言二句の二二文字

りなる。

来たるも亦た前ならず、去るも亦た後ならず…生まれ来て来るのが先というわけでもなく、死んで去くのが後というわけでもなく、前後際断していること。『渭南文集』巻四〇「松源禪師塔銘」によれば、松源崇嶽の遺偈には「来無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>来、去無<sub>レ</sub>所<sub>レ</sub>去」とあり、『無文印』巻四「行状」の「径山無準禪師行状」によれば、無準師範の遺偈には「来時空索索、去也赤條條」とある。

百億毛頭師子現：百億毛頭は人体に具わる百億もの毛先。毛頭は毛のこと、頭は名詞に付く接尾語。師子は獅子。百獸の王。ライオン。『景德伝燈録』巻二「袁州仰山慧寂禪師」章に「師在<sub>二</sub>瀉山<sub>一</sub>牧<sub>レ</sub>牛時、第一座曰、百億毛頭、百億師子現。師不<sub>レ</sub>答」（大正藏五二・二八二b-c）とある。師子吼：獅子吼。獅子の吼える声、遠吠え。獅子が吼えたと百獸が恐れ伏する。

泊然：落ち着いて静かなさま。心静かに利欲に迷わないさま。

年六十有一：世寿が六一歳。祖元は南宋の宝慶二年（一二二六）丙戌の年に生まれ、日本の弘安九年（一二八六）丙戌の年に示寂しているから、ちょうど還暦に当たっている。

臘四十有九：法臘が四九齡。一三歳で受戒してから弘安九年九月の時

点で法臘（坐夏）が四九年に達したこと。法臘は僧臘・坐夏とも、受戒して比丘・比丘尼になってからの年齢。

龕留：龕は遺体を入れる棺桶。棺桶に留めておくこと。

慈容は生けるが如し：慈しみ深い姿が生きているかのごとくであった

こと。

四衆：仏教教団を支える僧俗の男女。出家した比丘（男僧）・比丘尼（女僧）と在家の優婆塞（信士）・優婆夷（信女）の四つの衆。

茶毘の礼：葬式の儀式。茶毘は梵 *Teḍḍhā* の音写。闍維・闍毘とも。遺体を火葬にすること。広く葬式のこと。

送修：葬送のこと。野辺送り。遺体を茶毘所に送る儀式。

一会：一つの宗教的な集い。ここでは祖元の門下の人々。または葬儀に集った人々。

哀慕：哀れみ慕う。悲しみ慕って歎く。哀憐に同じ。

金棺：仏祖・高僧の遺体を納める棺の敬称。龕のこと。

双樹の間に隠るる：双樹は仏陀が入滅した拘尸那竭羅（クシナガラ）の沙羅双樹のこと。仏陀が入滅した際、悲嘆の涙が遺体を納めた棺

の彩色を隠してしまったという故事に準えた表現。『趙州真際大師語録』「行状」に「趙王於<sub>二</sub>時<sub>一</sub>尽<sub>二</sub>送<sub>レ</sub>終<sub>レ</sub>之<sub>レ</sub>礼<sub>一</sub>、感歎之<sub>レ</sub>泣、無<sub>レ</sub>異<sub>二</sub>金棺<sub>一</sub>匿<sub>二</sub>彩<sub>レ</sub>於<sub>二</sub>俱<sub>レ</sub>尸<sub>一</sub>矣」（中統藏一一八・二五三c）とあり、唐代の趙州從諗

（真際大師、七七八―八九七）が示寂した際の記事にも同様の記載が存している。

遺弟：遺された弟子。師僧が示寂した際に残された弟子たち。

靈骨：舍利の意識。仏や祖師の遺骨に対する尊称。

寺の後麓に塔す：寺の後方の麓に墓塔を建立したこと。掲傒斯撰「仏光禪師塔銘」では建長寺の後山に塔したとし、東陵永瑛撰「大日本

国山城州万年山真如禪寺開山仏光無学禪師正脈塔院碑銘」では円覚

寺の正統院に塔したとする。おそらくその何れにも墓塔が建てられ

たと解するのが正しいであろう。

### 「風貌と平生のありよう」

師偉絶天姿、淵深嶽峙、孤硬趣操、水清玉潔。長披伽梨、以道爲體。其機鋒一觸、鐵石崩崖、其提唱的切、霜弓劈箭。假令古佛出頭、亦須望風心死矣。蓋慈惠峻而發其用也、至化廣而利世也。海容百川之量、得圓照之正續也。住山至處丈室、蕭然受用之務、悉從減省、淡泊純實之行、終老無玷、峻勵沈嘿之懷、至死不移。乃古聖之著龜、後昆之榜準也。

嶽—岳 體—休 箭—笔 蓋—蓋

師、偉絶たる天姿、淵のごとく深く嶽のごとく峙ち、孤硬たる趣操、水のごとく清く玉のごとく潔し。伽梨を長披し、道を以て体と爲す。其の機鋒は一たび触れば、鉄石にて崖を崩し、其の提唱は的切にして、霜弓にて箭を劈く。假令古仏の出頭すとも、亦た須らく風を望んで心死すべし。蓋し慈惠は峻くして其の用を発し、至化は広くして世を利するなり。海の百川を容るの量、円照の正統を得たるなり。住山して至る処の丈室、蕭然として受用するの務めは、悉く減省に従い、淡泊にして純実なるの行いは、終老に玷無く、峻勵にして沈嘿せるの懐いは、死に至るまで移らず。乃ち古聖の著龜にして、後昆の榜準なり。

偉絶たる天姿：偉絶はすぐれて秀でること。きわめてすぐれていること。

と。天姿は生まれつきの美しい姿、天が授けた性質。生まれつき。天資。

天性。

淵のごとく深く嶽のごとく峙ち：水を湛えた淵泉のように深く、高大な山のように聳え立っている。淵と大山は沈着不動のさまを譬えたものである。

孤硬たる趣操：孤硬は独り群を抜いて硬い、ずば抜けて堅いこと。趣操は情趣と志操。その人の味わい趣きと頑固に守って変えない操。

水のごとく清く玉のごとく潔し：水や玉は清らかで艶のあるものの喩え。人格が優れ、氷のように清く、宝玉のように潤いがあること。

伽梨を長披し：伽梨は梵 *śālistambī* 僧伽梨の略。大衣・重衣。比丘の掛ける三衣の袈裟の中で最大のもの。九条衣ないし二十五条衣。長披は大きく羽織ること、袈裟を掛けること。

道を以て体と爲す：仏道修行を己の持ち前、本生とする。

機鋒：禅僧が修行僧に対して示す態度・手段が激しいさま。禅僧の接化の厳しさを剣先の鋭さに準えていう。

鉄石にて崖を崩す…鉄と石、志しが堅くて変わらないことの譬え。鉄石で山崖を崩すこと。

提唱…宗旨の大綱を示すこと。禪僧が僧俗に仏法を語り示すこと。的切…ぴったりしていること。適切。

霜弓にて箭を劈く…霜弓は霜のように光つて鋭い弓。劈箭は箭で貫き通す。

假令い…たといしよとも。假使・假饒・任従・従教・従你とも。

古仏…古の仏、過去莊嚴劫の仏。過去七仏など。ただし、ここでは往古の有徳の高僧などを尊敬した言い方か。趙州古仏（趙州從諗）とか隰州古仏（宏智正覺）といった表現。

出頭…顔を出す、頭を突き出す。まかり出る。正面に進み出る。

風を望んで…望風は遙かに人を仰ぎ慕う。遠くの人の評判は風に乗つて伝わってくることに因む。

慈悲…慈しみ恵むこと。恵み。慈恩。ここでは無学祖元の温かい慈悲の心。

至化…この上ない接化・布教。最高の化導。ここでは無学祖元のすぐれた教化をいう。

海の百川を容るの量…大海が一切の河川の水を受け容れる度量を有すること。『嘉泰普燈録』卷一六「湖州何山仏燈守珣禪師」の章に「云、如何是向上事。曰、大海若知足、百川必倒流。」僧禮拜（卍統藏一三七・二〇c）とある。

円照…無準師範の墓塔の名称。円照塔。ただし、ここでは直接に無準

師範のことを意味している。

正統…径山に建てられた無準師範の塔頭、万年正統院のこと。ただし、ここでは無学祖元が無準師範の法門を正しく受け継いだことの意に用いている。

住山…山林に隠棲する、一カ寺に住持すること。住職となること。丈室…方丈のこと。前出。

蕭然…物寂しいさま。伽藍としたさま。騒がしく忙しいさま。

受用…受け用いる。活用する。受持して活用すること。

減省…減らし省く。減らして少なくする。

淡泊…あっさりしている。心がさっぱりしている。澹泊。色彩や味あるいは意欲などについていう。

純実…混じり気がなく誠あること。混じり気のない誠。純誠。

終老に玷無く…終老は晩年を過ごすこと、老いを終えること。玷は玉の傷、玉に瑕が着くこと。過ちを犯すこと。

峻励…厳しく激しい。厳しく努め励むこと。俊切・峻烈。

沈嘿…沈黙。少しも言を出さない。落ち着いていてことば数が少ないこと。嘿は黙に同じ、口をつぐんでだまり込むこと。

死に至るまで移らず…死去するまで変わらなかつたこと。死に至るまで自らの操を変えなかつたこと。

古聖の著龜…古聖は古の聖人、古の聖者。古徳。ここでは特に往古の仏道の祖師をいう。著龜は著蔡。古いに用いる筵竹と龜の甲羅。転じて先見の明があることの譬え。

後昆の榜準：後昆は後世、後の世。また後の世の子孫。ここでは特に

後世の仏法の遠縁をいう。榜準は手本・見本・模範・標準、他の模

範となるもの。

### 「語録の編集と行状の撰述」

兩朝縁化之所包事、出弘獎之悲願也。嗟呼、宗社梁折矣、少林遺芳盡矣。有志衲子哀恨何已。偈頌語錄法語機緣問答甚富、未及詮次、已盛於世矣。因據門人所傳行實、合余所聞、會編始末、永爲宗門不朽之傳也。屬末比丘靜照、謹狀。

兩朝縁化の包む所の事、弘獎の悲願より出づるなり。嗟呼、宗社の梁は折れぬ、少林の遺芳は尽きぬ。有志の衲子、哀恨すること何ぞ已まん。偈頌・語録・法語・機緣・問答、甚だ富めり、未だ詮次するに及ばざるに、已に世に盛んなり。因りて門人の伝うる所の行実を撫い、余が聞く所に合して、始末を會編し、永く宗門不朽の伝と為さん。屬末比丘靜照、謹しんで狀す。

兩朝縁化の包む所の事：兩朝とは宋朝と日本の二つの王朝。縁化は法

縁勸化、仏法の縁があつて人々を教え導くこと。無學祖元が南宋と

日本の兩國で仏法を示したありよう。

弘獎の悲願：弘獎は大いに励ますこと、広く勧めること。悲願は大悲

願力。慈悲に基づく誓願。仏菩薩などが大慈悲心によつて起こす誓願。

嗟呼：歎き悲しむ声。感歎する声。嗚呼・嗟呼・嗟哉なども。

宗社の梁：宗社は宗廟と社稷。先祖の御靈屋。ただし、ここでは単に

寺院の意で使つているか。梁は家の棟を支える大きな横木。家屋の

重要な部分。棟梁。ここでは仏門における重要な人物。

少林の遺芳：少林は洛陽（河南省）登封県の嵩山少室峰の少林寺のこと。

転じて少林寺に面壁した禪宗初祖の菩提達磨を指す。遺芳は亡くなつ

た後にも残る立派な業績。

有志の衲子：有志は道を求める志があること。衲子は衲衣を着た僧

禅僧のこと。

哀恨：悲しみ恨むこと。哀怨。

偈頌：詩偈。単に偈や頌とも。詩句のかたちで仏徳や教理を述べたもの。

韻文の体裁をとる禪宗ないし仏教の漢詩のこと。

語録：儒者や僧侶の談話を筆記した書物。とくに禪宗で一山の住職が

なした上堂や小參・法語・偈頌などの説示を門人らが収録したもの。

法語：禅僧が出家修行者や在俗の信者の一人ひとりに対して仏法の道

理を示して付与した語句。韻文や散文の違いがあり、また漢文で示

されるのが主であるが、日本の禅僧の場合、和文で記した仮名法語

も多く、種々の区別が存する。

機縁：機会と因縁。学人が師の接化を受けた機会・めぐり会い。悟道の契機となった因縁。

問答：弟子が問いを発し、師が答えること。師資の間でなされる応酬。

問酬・商量。

詮次：選択して区別して述べること。

門人の伝うる所の行実：祖元の弟子たちが伝えていくところの行実。

中国から随侍して来た弟子や日本で門下に列した慧曇らが伝えていた祖元の伝記のこと。祖元が弘安九年（一二八六）に示寂した直後、慧曇を中心に門人らによってまとめられた伝記史料であり、単に「無学和尚行実」といった表題であったものと見られる。かなり詳しく

祖元の事跡を書き残していたはずで、その散逸が惜しまれる。余が聞く所：私が聞いたところのもの。余は無象静照の自称。始末：始めと終わり、始めから終わりまで。一部始終。ここでは祖元が生まれてから示寂するまでの生涯の事跡。

会編：集めて編纂する。合わせて編集する。宗門不朽：宗門は禅門、禅宗のこと。不朽は朽ちない、永く滅びないこと。宗門に末永く伝わること。属末比丘：属末は末に連なる、ここでは仏法の末裔に名を連ねる、禅宗の末孫に連なること。比丘は大僧、受戒した男性の僧侶。

静照：松源派の無象静照（法海禪師、一二三四—一三〇六）のこと。相模（神奈川県）鎌倉の人。執権北条時頼（最明寺殿）の親族とさ

れる。京都東福寺の円爾（聖一国師）に参じた後、建長四年（一二五二）に入宋し、杭州（浙江省）径山の石溪心月の法を嗣ぐ。杭州の浄慈寺や径山で同じ松源派の虚堂智愚にも参学する。文永二年（一二六五）に帰国し、晩年の蘭溪道隆に随侍した後、文永九年（一二七二）に相模の高峯法源寺に開堂出世し、建治三年（一二七七）には筑前（福岡県）博多の聖福寺に住する。無学祖元が来日するや接化を補佐しており、本史料によって祖元の示寂にも立ち会ったことが知られる。その後、山城（京都府）平安城の仏心寺や相模の大慶寺の住持を歴任し、鎌倉に真際寺を開く。正安元年（一二九九）に北条貞時の請で鎌倉の浄智寺に陞住する。嘉元四年（一三〇六）五月一日に世寿七三歳で示寂する。『無象和尚語録』二巻が存し、また『興禅記』を著して比叡山の庄迫に反駁した。語録に収められていないが、伝記史料として法孫の西隠善金が「浄智第四世法海禪師無象和尚行状記」を撰している。『仏光国師語録』卷三「住日本国相州巨福山建長興国禪寺語録」に「無象西堂至上堂」（大正蔵八〇・一六〇b~c）を収めており、同卷八「偈頌」に「和<sub>下</sub>無象春日游<sub>上</sub>塔<sub>上</sub>韻」（大正蔵八〇・二二五a）を、同卷九「円覚開山山光円満常照国師拾遺襟録」の「書簡」に「答<sub>二</sub>無象和尚<sub>一</sub>書」（大正蔵八〇・二三〇b）を収めている。また『無象和尚語録』卷上「住平安城仏心禪寺語録」に「無学和尚忌拈香」（五山新集六・五三三）を収め、同卷下「序跋」に「跋<sub>二</sub>無学和尚法語<sub>一</sub>」（五山新集六・五八三）を、同卷下「仏祖贊」に「讚<sub>二</sub>無学和尚<sub>一</sub>」（五山新集六・五九二）を収めている。



〔付記〕本稿を作成する切っ掛けとなったのは、平成二三年（二〇一一）冬に高橋秀栄先生より平成二四年度の第三六回横須賀市・市民大学「鎌倉禅の源流―北条時頼の没後七五〇年を記念して―」で講師の一人に依頼されたことに起因している。このとき高橋先生から私に与えられた課題は「蘭溪道隆が永平寺道元に与えた手紙」と「北条時宗と円覚寺開山無学祖元」という二つであった。

幸いに建長寺開山の蘭溪道隆に関しては、すでに『蘭溪和尚語録』や伝記史料などをかなり考察していたので問題はなかったが、円覚寺開山の無学祖元に関しては、修士課程の頃に虚堂智愚の研究をしたとき、無学祖元の伝記史料を調べた程度であったため、今回、本格的な考察をなす必要性を感じたのである。そのため平成二四年度の仏教学部の演習でも、私はこの無象静照撰「仏光禅師行状」を題材に選び、一年間にわたって、演習の学生たちにも日頃それほど馴染みのなかったであろう無学祖元という人の伝記に取り組んで頂いた。そうした成果を踏まえて私なりに独自にまとめたのが本稿にほかならない。読解や註釈に関して大方の叱正を頂ければ幸いである。